

白梅の香りに . . .



n a o m i

序

「どうしたって言うんだ。毎日これじゃやってられないよ」

男が独り言を言っている。

五十嵐正巳。二十九歳。メモリーコーポレーションの社長。

一月前に、前社長梶春樹の事故死により、突然この会社を引き継いだ。

二十二歳の時に縁があってこの会社に入社した。

前社長の時は、手広く、会社やサークルの為には講師を呼んで各地で自己啓発セミナーを開き、個人の為にはチャネリングを主にしたカウンセリングをセッティングする事で利益を得ていた。

前社長を失った今、大手の為の何軒かのセミナーを柱に、少しだけカウンセリングの仕事を残した。社員も元々そんなに抱えていた訳ではないが、最小限必要な人数に減らし、規模も半分に縮小した。それも前社長がすべて指示してあったのだ。

会社経営に加え、カウンセリングの仕事での契約チャネラーとクライアントのマッチングが、五十嵐正巳の主な仕事。

前社長梶春樹は、不思議な力を使ってそれをこなしていた。レベルの合った者どうしをマッチングする。彼は見えないものを見る目を持っていた。

そして五十嵐正巳にもそれは有る。そのせいで前社長は五十嵐に自分の仕事すべてを仕込んだ。会社経営についても入社当初から徹底的に仕込まれた。しかし五十嵐にとって本当に有り難かったのは、誰もが恐れた彼の普通人と異なる能力を認め、それを仕事に役立てる方法を教えてもらった事だった。

前社長は五十嵐のすべてを愛した。もちろん五十嵐も前社長梶春樹を全身全霊で慕っていた。

「梶さんならどうしたんだろう？」独り言が続く。

「やっぱりめぐみさんの所へ行くしかないか・・・」

伊藤めぐみ。梶春樹の愛人。彼女の存在が梶春樹を変えた。自分の死の時期を悟った梶春樹は、伊藤めぐみに五十嵐正巳の後を託していた。

『ここに書いてある人のところへ、節分の日に赤い薔薇の花束を持って行くように。その時にはくれぐれも刺の取り残しには気をつける事。それとこの封書も届けてくれ。そこでちゃんと読んで貰ってしっかりあいさつするように』それが最後の言い付けだった。

五十嵐は渋々それに従った。何故渋々かと言うと、その女が彼から梶春樹の最後の時間を奪った女だったからだ。嫉妬。決して梶春樹の心が五十嵐から離れた訳ではない。

ただ、その女と出会ってから梶春樹は、まるで少年のように一途にのめり込んで行った。そして、残り少なくなった毎日をその女と過ごした。

『僕だってもっと梶さんと一緒に居たかったのに』それが五十嵐の正直な気持だった。しかし、梶春樹の纏っていたエネルギーの場が、最後まで広がり続けているのも五十嵐には判った。その事からも悪い女に引っ掛かっている訳ではない事を五十嵐は認めるしかなかった。

節分の日、言い付けどおりに花束を持って伊藤めぐみに会いに行った。初めて彼女を見て、五十嵐は本当に驚いた。肉眼で見ると彼女はごく普通の女性だった。霊能力者でないことはすぐに判った。しかし、自分の知っている範囲の霊能力者ではない彼女の纏うエネルギーの場が梶春樹のそれよりさらに大きく柔らかかったのだ。信じられない思いだった。その上彼女の傍にはにこにこ笑う龍がいた。

彼女の大きく柔らかなエネルギーの場の中にいる事は、彼らのようなタイプの力を持つ者にとって、天国にも等しいも

のなのだ。

「やっぱり電話しよう」五十嵐はそう独り言を言って電話をかける。しかし相手は外出中らしく留守番電話が応答した。五十嵐は何も言わずにそれを切った。

電話を切った途端、梶春樹の気配がして、外出したくなった。外出するべきだと思った。そんな感覚は別に特別ではない。それまでもそういう事は何度もあった。霊的感応力が強いのだ。

『梶さんが何処かへ導こうとしている』そう思って五十嵐はあてもなく車を走らせた。そして、大阪城公園の梅林へ導かれた。

それが五十嵐正巳にとっての始まりだった。

大切な人を失って、一月程が経った頃の事だった。

急ぎの仕事を徹夜で仕上げ、納品した帰りに地下鉄の中の梅林の広告に心引かれた。それで私は、そこに書かれている最寄りの駅まで乗り越して、大阪城公園の梅林へ向かった。

地下鉄の駅を降りて、公園の中を道案内に沿ってしばらく歩く。何組かの若いカップルが肩を抱き合ってベンチで寄り添っていた。

野外音楽堂の横を通り、長い階段を上り、また長い坂道をぶらぶら歩く。別に急ぐ必要もない。柔らかな色の風に乗って馥郁とした香りがどこからともなく漂ってきた。

その香りを楽しみながらしばらく行くと、右手一面に梅林が見えた。天気は上々。冬の名残を惜しむかのような厳しい寒気が去り、ここ二、三日は春の訪れのような穏やかな日差しと暖かな気温が続いている。その香りに誘われるように梅林に足を進めた。

早咲きの木は既に咲き切ってはいたが、それ以外の木は本当に見頃と言って良い具合だ。その中でも特に心を引かれた白梅の古木の下で、立ち止まり空を見上げた。秋とは違い、少し低めのパラフィンのような柔らかな色合いの空に力強く枝を伸ばし、先の方にまだ蕾を残しているものの、一枝の七割程に白い可憐な花が咲いていた。

私は立ち止まり、一人でその色のコントラストと柔らかな香りを楽しんだ。

「ハルキ！こっちよ！」 「ねえさん！何だそっちで待ってたのか」

突然私の耳にその声が飛び込んで来た。待ち合わせの姉弟の何でもない会話だったのだろう。しかし、私にとってそれは大きな衝撃だった。

気が遠くなるような感覚と共に目眩を感じた。そっと目を閉じ、俯く。そして、足元にある鉄の柵を掴み、辛うじて体を支えた。胸の奥で心臓が跳びはねるような感じで、動悸がした。

「めぐみさん。大丈夫ですか？」すぐ後ろで私を呼ぶ声がして、男の腕が私を支えた。

私は驚いてその男の顔を見る。一月前に死んだ不思議な力を持った愛人の、別の愛人。五十嵐正巳だった。彼もまた同じように不思議な力を持っている。

「何故正巳が此処に？」私はそう尋ねた。

「大丈夫ですか？」正巳がもう一度尋ねた。

私は頷いて見せる。動悸もほとんど収まっていた。

正巳が私を落ち着かせるように微笑んで見せると言う。「ちょっとそこの店で休みましょう」

私はもう一度頷いて見せ、それに同意する。

正巳は私の腰に腕を回して支えながら、すぐ傍にあった休憩所のような店に連れて行き、店先の緋毛氈の敷かれた椅子に座らせた。そして中のおばさんに向かって、甘酒を二つ注文した。

「びっくりしましたよ。倒れるかと思った」改めて正巳がそう言った。

「私もびっくりしたわ。何故あなたがこんな所に居るの？」その頃には落ち着いた私が尋ねる。

「変ですか？」正巳がまじめな顔で言った。

「それはそうよ。一人で梅の花を観賞するタイプには思えないもの」

「それは心外ですね。僕だって梅の花を見て、美味しそうだとぐらい思いますよ」そう言って正巳がやっと笑った。

「花が美味しそうなの？」

「いいえ・・・この花がああ梅の実になる訳でしょう？」

「分かったわ。随分先を思うのね。梅干し？梅酒？それとも梅ジャムかしら？」

「甘く煮た梅の入った和菓子ですよ」

「不思議な奴だとは、思ってたけど、ほんとに変な奴。それであなたは美味しそうなものの元の姿を見に此処へ来てたわけじゃないんでしょう？」

「それはそうです。梶さんに言われて此処へ来たなら、めぐみさんが居たって言う事です」

梶春樹、私と正巳の愛人だった男の名だ。

「春樹がなんて言ったの？」

「言葉で言われた訳じゃないけど、僕にはそう思えたんです。梶さんの気配がして急に外に出たくなかったです。そして車でこの近くを通りかかったら、どうしても此処へ来たくなくなった。そんな感じです」俯いて自分の足元を見ながら正巳が言った。

「春樹の奴」私が言う。正巳はそれに微笑んで見せた。

甘酒が運ばれて来て、正巳が代金を払う。それを二人で梅を見ながら暫く黙って飲んだ。

半分ぐらい飲み終わって、私が彼に尋ねる。「何があったのかしら？」

「ええ、ちょっとやっかいな事が続いています」

「なるほど」私は頷いて見せ、残りの甘酒を飲む。

正巳は持っていた甘酒を飲み干し、それを置いて大きく深呼吸して目を閉じた。

私はそれを見て、ゆっくり名前を呼ぶ。「春樹」

それは名前の呪術。この不思議な力を持った五十嵐正巳と言う男に、更に不思議な力を持った梶春樹を降ろす方法だ

。

暫くして正巳が顔を上げ、言った。「姉さん。久しぶり」

「どうしたの？」私が尋ねる。

「姉さんと梅でも見ようと思って」

「そう。でも、それだけじゃなさそうね」

「ああ。けど、せっかくだからそれを飲んだら花の下を散歩しよう」

「良いわよ」私はそう言って残りの甘酒を飲み干した。

「さあ、行きましょう！」私が立ち上がると、春樹の意志を持った正巳も立ち上がった。

春樹は私の肩を抱くと、歩き始める。

「綺麗だ。それに香りも良い」春樹が花に顔を近づけて香りを楽しみながら言った。

「あなたも美味しそうだって思う？」

「いや、旨そうだとは思わない。五十嵐はまだ若いからな」

「そうね。でも、あなたなら梅酒の原料に見えるんでしょうね」

「まあな。けど、俺は甘いのが苦手だ。だから花だけで良い」

私は確かに死んだ男と散歩していた。

「ねえ、春樹。春には一緒に出雲の桜を見に行こうって言ってたわよね。あの約束はどうなるの？」それは冬の出雲での約束。

「行こうか？良いね。出雲の桜」

「でも、あなたは死んだのよ」なるべく感情を抑えてそう言った。

「そうだな。それは否定しない。でも、今姉さんは誰と散歩してる？」

「春樹とよ。でも、体は正巳」

「だったら五十嵐も連れて行けば良い」

「あなたの恋人よ」少し語気を強めて言う。

「まあ、良いじゃないか。死んだ男に妬くなってるって言うだろう？それにどうせみんな幻だ。たいして変わりはない」

「こんな状態がいつまで続くのかしら？」ため息混じりに言う。

「どう言う意味だ？」

「正巳とあなたとの三角関係」もう一度大きくため息をついた。

「気にするな。元々は同じものだ。それに、姉さんは今日とても巧く呼び出した。そのうち慣れるさ」
初めての時に、怒った私が突然呼び出してしまい、正巳に随分負担をかけた事がある。

「暫くはこのままなのね」

「そうだ。姉さんが俺を必要としなくなるまでは、こうしていれば良い」そう言って、肩に回した腕に力を込めた。

「これは、私に必要な状況なの？」

「この状況を共有してるみんなにとってだ。要するに俺と、五十嵐と、姉さん」

「良く判らないわ。それで、あなたは私に何をさせようって思ってるの？」

「まあ、急がなくても良い。せっかくの花だ。これを楽しんだ後でまた説明する」

私は彼の横で黙って頷いた。顔を見なければ、確かに私の肩を抱いているのは正巳ではなく春樹だった。しかし、正巳は春樹より十歳も若く、まだ会ったのは二度目だ。良く知らない男と肩を組んで散歩している事には違いない。なんとなく違和感を感じていた。

「姉さん。そんなに緊張するな。まるで初めの頃みたいだ」春樹はそう言って面白そうに笑った。

「あなたといるといつも緊張させられる。初めての経験ばかりよ」

「そうか？それもきっとそのうち慣れるさ。五十嵐も良い男だ。ところで姉さん、旦那とはうまく行ってるのか？」

「そう、言って無かったわね。彼とは離婚したの」

「俺との事、許してもらえなかったのか？」

「そうじゃないわ。彼がもう一度やり直したいって言って、離婚届を出したの。でも、生活は今までのまま。忙しくない時には、家に帰るし、忙しかったり、面倒な時には私のオフィスに泊まってる。ちなみにここ暫くは仕事が詰まってたから帰ってないけど。でも、彼は毎日電話してくるわ」

「姉さんが一番変な奴かもしれない」

「でも、私は正真正銘生きているわよ。でも、あなたは死んでる」

「よしてくれないか、そんな言い方。何か俺、とっても悪い事してるみたいじゃないか」

「悪霊もどき」私が言う。

「確かに。それは近いかもしれない。でも、俺、姉さんの事愛してるぜ」

「今もまだ？」

「もちろんだ。愛を持ってる悪霊なんて俺の経験上見た事が無い」

確かに彼は生前沢山の悪霊と出会っている。それと付き合う事が仕事のようなものだったから。そして、それを引き継いだのが五十嵐正巳。

「正巳の事も愛してるの？」

「それを今言えて言うのか？」

「言いにくい答えなの？」私が少し意地悪な気分で言った。

「相変わらず姉さんは意地が悪い。五十嵐は俺にとって可愛い弟みたいなものだ。要するに、姉さんがいて、俺がいて、五十嵐がいる。三人兄弟だと思ってくれ」

「肉体関係のあった兄弟？その私が長女なの？」

「深く考えるな。肉体は幻でしか無い事をちゃんと知ってるじゃないか。それに姉さんなんだから長女だろう。年からしてもな。まあ、ちょっと頼りない分、弟達がしっかりしてるって思ってくれ」

「勝手な奴。ところであなたの家族は大丈夫なの？」

「ああ。子供達もちゃんと育てられるさ。嫁さんがしっかりしてるし、必要な分だけは残してある。子供や嫁さんにはそれなりの俺の幻がある。それに、あいつは良い男を見つけて再婚してくれるだろう。誰もが自分の人生を生きる」

「本当に勝手な奴ね。どうしようもないわ」

「そう言うな。誰でもいつか死ぬ。それが俺にとって先月だっただけだ。みんな自分の道を歩くしかない。嫁さんも、子供達もな」

「それであなたは勝手に悪霊もどき？」

「また、それを言う。ほら、立ち止まって目を閉じろ」

そう言われて立ち止まった私を、春樹は、引き寄せ強く抱き締め口づけした。それは間違いなく春樹の口づけだった。一月前まで毎日のように彼はそうして私を抱き締め、愛を表現していた。

私は彼の胸に両手を突き出して彼から離れる。

「こんなところで恥ずかしいじゃないの」私がそう言うと、彼はとても人懐っこい顔で笑った。私にはその顔が、正巳の顔に二重写しにされた春樹の顔に見えた。

私は首を振って目を擦る。春樹が笑いながら言う。「どうした」

「頭痛くなりそう。少しはこっちの事情も考慮してくれないかしら？生きている人間にはそれなりの法則があって、それに沿って生きてるのよ。だから、もう少しあなたの今いる世界をこちらに近づけて」

「気にするな。俺と姉さんの間でそれは必要ない。元々そっちの世界もこっちの世界も同じものだ。それに、姉さんはきつとその間に立って巧くやる。初めは戸惑うかも知れないが、そのうち慣れてちょうど良いところで落ち着くさ」

「能天気ね」

「そんなとこだ。要らない柵から解放されたからな。それに、姉さんも一つ柵をはずした」

「自分が自分以外ではあり得ないって知ったから？」

「そうだ。でも、五十嵐はまだそこまで理解してない。俺と姉さんでもう少し助けてやらないとならない」

「どうして私がそれをしなければいけないのよ」

「姉さんがそれをしたいからだよ。姉さんはそれをするのが好きなんだ」

「良くそんな事を言うわね」相変わらず勝手な奴だ。

「大丈夫。姉さんはきつと五十嵐を好きになる。そしてその過程を楽しむ事が出来る」

「あなたって、本当に・・・」

「どうした？」

「構わないわ。確かに今の私の手を取っているのは春樹だって言う事が私には判るから。でも、きつと私の恐怖はいつかそれを否定する」

「それはそれで良い。少しづつ進めば。肉体を捨てた俺は、もう時にも縛られない。姉さんが何かを恐れるなら、それは俺の怖れでもある。一緒にその怖れを楽しもう。俺が体を離れて失ったものを姉さんに預けてある。姉さんも体を離れた俺の意識を利用出来る。つまり、お互い様って言う事だな」

「お互い様ね。変な奴。でも、なんとなくあなたが言うと楽しそうに聞こえるわ」

「もちろん、基本的にすべてが楽しいものだ。俺達はそれを理解した。もう、元に戻れない」

「知ってしまったから、もう知らんふりは出来ないって言う事？」

「正解！やっぱり姉さんは頭が良い」

「良く言うわね。ところであなた、今日はいつまでいるの」

「姉さんが落とすまで」

「正巳は、大丈夫なの？」

「大丈夫。後で会社に電話しよう」

「あなたが？」

「どっちでも良いさ。俺が五十嵐の振りをすれば良いんだから。こいつの喋り方ぐらい知ってるさ。ところで姉さんは仕事、大丈夫なのか？」

「ええ。問題無いわ。急ぎのを納品した帰りだったの」

「だったら一緒に飯でも食おう」

「何か変よね。何故、あなたが食事に誘うのかしら？」

「良いじゃないか。俺は腹が減らなくても五十嵐は減る。それに一緒に飯を食うって言うのはコミュニケーションの一つでも有る」

「今更あなたとコミュニケーションを取っても仕方ないと思うけど・・・」

「姉さん。抵抗は止める。俺に逆らえないのは知ってるだろう？」

「ええ。ちゃんと知ってますよ。あなたは誰でも自分の思いどおりに動かすのよね。その上自分自身の命さえ・・・」

「姉さん。もう良いだろう？」

「分かってるって。一ヶ月も放って置いたんだからちょっとぐらい文句を言わせてよ」

「どっかの飲み屋の女みたいな言い方だな。後で五十嵐に笑われるぞ」

「あなたに合わせた冗談よ。そう言えば彼、今の状況を理解しているのよね」

「ああ。それに対して考えたり思ったりする部分は止まっているが、つけっ放しのテレビのように何も考えずにそれを見ている感じだ」

「それが霊媒体質って言うものなの？」

「人によって色々有るけど、五十嵐のはそう言うパターンだ」

「じゃあ、あなたと正巳が会話するのはそうするの？」

「言葉は必要ない。俺と姉さんの間でも本当は必要ないんだ。でも、今の状態が最初が一番受け入れやすいんじゃないかって思ったからこの状態を取っているだけだ」

「あなたの思いやり？」

「そうじゃない。俺だって初めての事だから色々試してるんだ。それに、確かにこの状態は面白い。姉さんが戸惑ってるのも面白いし、五十嵐の体を借りて姉さんを抱くのも面白い」

「あなたに残っている欲ってどんなものなの？」

「楽しみだけ。だから何でも楽しめる」

「そんなものなんだ」

「なにかもかが凄くピュアで素晴らしい。この前姉さんを抱き締めてキスした時凄く官能的だった」

「病院ででしょう？」

春樹を失って悲しみのあまり、何も食べられなくなり、その上精神に錯乱を起こし、入院した時に、夢の中で春樹と会った。その時彼が呼び出し方と落とし方を教えてくれた。

「そうだ。俺も正直言ってびっくりした。肉体って言うのは愛し合う為には結構邪魔なものだったんだな。コートの上から抱くのと、裸で抱くのの違いぐらいある。どっちもそれなりの良さはあるけどな」

「私もそう思ったわ。あの時には私も肉体を離れていたから。でも、肉体が有るから個に分かれていて、愛し合う事を求めているのよね」

「そうだ。でも、今の俺みたいに特殊な形で存在すると、その裏側のからくりみたいなものも判る」

「存在しているのね？」

「もちろんだ。姉さんが作り出した幻として、しっかり存在している。五十嵐にとっても同じだ。そして姉さんも五十嵐も俺の作り出した幻」

「やっぱり幻でしか無いのか」

「そう。でも、姉さんには判るだろう？俺の存在と五十嵐の存在がどう言うものなのか」

私は首を振る。

「拒絶するなって言ってるだろう？知ってしまった限り知らんふりは出来ないって姉さんが言ったんだ」

「判ってる。でも、もう少し時間を頂戴。私、もう少し足掻きたいの」

「判った。それが姉さんのやり方なんだよな。俺、そんな姉さんが大好きだぜ」

そう言って生きていた時のように頭を掴んで揺すった。

私は首をすくめて言う。

「春樹。もうちょっとレディとして扱って」

「判った、判った」春樹はそう言って笑った。春樹は死んだ後も何一つ変わっていない。

私達は梅林を出て、正巳の乗ってきた車に乗り込む。社長専用車。春樹がいつも乗っていた車だ。

私は春樹に言う。「良く車の場所、判ったわね」

「俺が五十嵐を連れて来たんだ」

「なるほど。ところで、一度正巳に戻そうと思うんだけど」

「どうして？俺の運転じゃ不安か？」

「そうじゃなくて、彼の意見も聞いてみないと・・・」

「そうか、だったら会社にも電話するように言っておいてくれ」

春樹はそう言ってエンジンを駆けようとしていた手を離し、全身の力を抜いた。車の中は春のような日差しに暖められて、とても気持ちの良い暖かさだ。

「春樹。帰って」私はそう言って彼を観察する。

彼は暫く全身の力を抜いたまま、シートに身を委ねていた。時間にして三分から五分ぐらいのものだ。そして、一番初めに腕に力を入れ、次に目を開けた。その後首を二三度振って言った。

「会社に電話するんでしたね」

「大丈夫？疲れていない？」私が尋ねる。

正巳は微笑んで見せるとそれに答えた。「全然。梶さんの波動がまだ僕の中に残ってます。とても気持ちが良い」

「私、あなたに謝らなくちゃいけない」

「何をですか？」

「何をってそのお。春樹が勝手にあなたの体を使って、えっと・・・」

「ああ、キスの事ですか。気にしないで下さい。梶さんが降りてる時には僕じゃないですから。それに、役得かも知れない。梶さんはもてたから」

「そう言う問題なの？でも、あなたにも恋人がいるんでしょう？」

「いいえ。僕、特定の人をあまり上手に愛せないんです。普通の関係だと、いいところにだけ焦点を当てて好きになれるんですが、恋人同士になるとどうしても相手の事が全部知りたくなくて、それがまた全部判っちゃうものだから・・・」

「可哀相に。でも、春樹も判ってたけど、結構上手にいろんな女を愛してたわよ」

春樹も人の思いや心の中がすべて判ると言う能力を持っていた。それに前世での因縁も読みとれたのだ。

「梶さんは特別です。とても強い人だったから。でも、僕には出来ない。怖いんです。人の思いが・・・」

「そう。辛い人生ね」

「でも、梶さんがいてくれるからきっと大丈夫だと思います。それにめぐみさんも」

「私に何も期待しないでね。私には何の力も無いんだから。それにあなたより一回りも年上のおばさんよ」

「梶さんとおふくろもそうでした。ちょうど僕とめぐみさんと同じだけ違う」

春樹は正巳の母親とも因縁があって、関係を持っていた。

「呆れた人達ね。ところで春樹が食事に行こうって言ってたんだけど、あなたは何を食べたい？」

「何でも良いですよ。僕は基本的に好き嫌いは無いですから。それに、梶さんが食べるのなら僕は眠っているようなものです」

「眠ったまま色々な事をするの？」

「そんな感じですね」

「でも、あなたが嫌な事をしようとしたらどうなるのかしら？」

「嫌だって思う気持ちが眠っているんです。だから、もし悪霊が降りて来て殺人をしようとしても、僕はそれに逆らえ

ない」

「怖い話しね」

「でも、梶さんはそんな事しないから。だから安心していられる。それに、本当に気持ち良いんです」

「それであなたに春樹を降ろす私が必要だったって言う訳？」

「多分。でも、僕にもまだ分からないんです。梶さんはめぐみさんに呼んでもらわなくても、今日此処へ導かれたみたいに、感じる事が出来ます。それに確かにめぐみさんはとても大きなエネルギーの場を持っていて、その中にいる事は心地良いけれど、それが僕にとってどんな意味が有るのが判らない。けれど、梶さんが僕にそれをしろって言う限りきつと必要な事なんです」

「絶対に春樹を信じているのね」

「めぐみさんはどうなんですか？」

「春樹を信じてる訳じゃないわ。私は私の中にいる私の神を信じてるだけ。私の神って言うのは私自身の事でもあるけど。でも、信じてるって言うのもちょっと違うかな。私は私が神である事を知っているって表現した方が近いかも知れない。それに、私にとって必要なものしか私の世界には存在しないの。春樹が悪霊もどきになって私に纏わり付いているのも、私にとって必要だからだって言う事も知ってる。だから春樹があなたを私の元に送り込んだのも否定する気になれない」

「でも、さっきめぐみさんは足搔いてみるって言ってましたよね」

「ええ、そうよ。それが私のやり方だから。でも、結果は同じよ」

「時間の無駄じゃないんですか？」

「無駄なんて何も無いわ。時って言うものはね、必要な分だけ用意されているのよ。そして規則正しく流れている訳でも無い」

「僕にはまだそれは理解出来ません」 そう言って頭を振った。

私はそれを見て笑いながら言う。「心配しないで。必要な事は必要な時に判るの。今はあなたに必要なから判らないだけなのよ。あなたが今求めているものだけがあなたの元にやって来るの。そして、時を理解する必要が出来たら、ちゃんと練習問題付きのテキストが用意されるわ」

正巳はそれにも首を振って見せた。

「取り敢えず会社に連絡しておきます」彼はそう言って携帯で電話をかけ、クライアントと一緒に食事をするから今日は帰社しないと断って電話を切った。

私は笑いながら言う。「どっちがクライアントなのかしら？」

正巳も笑って言う。「もちろん僕の方ですよ。僕がめぐみさんに相談に乗ってもらおう訳ですから」

「仕事上の問題なの？」

「良く分からないんです。僕が説明する方が良いですか？それとも梶さんにしてもらいましょうか？」

「どっちでも良いけど、取り敢えず食事に行きましょう」

「判りました。僕は出来ればイタリアンが食べたい気分です」彼はそう言ってまたシートに全身を預けて力を抜いた。

「春樹」私はもう一度春樹を呼び出す。

「片付いたか？」春樹が言った。

「ええ、行きましょう」

春樹は慣れた様子でエンジンを駆けた。

「何を食べたい？」春樹が言った。

「正巳はイタリアンが良いって言ってた」

「姉さんは？」

「私もそれが良いわね。良い店を知ってるわ」

「じゃあ、そこにしよう」そう言って春樹は車を発進させた。

私は郊外にあるその店の場所を彼に告げる。彼は判ったと言ってそこへ向かった。

まだ時間が早いので客はほとんどいなかった。私はウェイターに言って一番奥まった席に案内して貰った。

「五十嵐の嫌いな物を食べようか？」春樹が悪戯っ子のような顔で言う。

「可哀相な事をするんじゃないのよ」私が言う。

「でも、栄養の偏りが直るぜ」

「彼ももう大人なんだから、彼の好みを優先させて上げて」

「姉さんは五十嵐には優しいんだな」

「まだ会ったのは二度目なのよ。意地悪するのにはもっと慣れる必要があるの」

「そう言うものか。取り敢えず面倒だからコースで頼んでくれ。五十嵐に好き嫌いは無い。それと五十嵐はあまり酒が飲めないからワインはグラスにしてくれ。それだけがこの体の不便なところだ」

「それは良かったわ。ウワバミはあなただけで充分」

私はウェイターを呼んでコース料理を二つ頼み、ハウスワインをグラスで赤と白を各々一つづつ頼んだ。

「ところで何が起こってるの？」

「その話なんだが、ちょっと面倒なんだ」春樹が真面目な顔で続ける。

「年末の悪霊騒ぎを覚えてるか？」

「あなたが名前を呼んで落としたあれ？」

昨年末春樹がマッチングしたクライアントとチャネラーの間で時の振れた因縁が発生して、悪霊状態の幻を作り出してしまい、それを春樹が力づくで押さえ付けたという話を聞いた事がある。

「それ。原因も状況もそれぞれ違うが、あんな状態を次々に五十嵐が呼び込んでいるんだ。今のところこいつの力で何とか押さええてはいるが、それが通用しなくなるのも時間の問題だ」

「そんなに酷いの？」

「ああ。こいつにはまだ愛が判らない。愛すると言う事がどう言う事なのかが理解出来ないんだ。だから、どうしても力でねじ伏せようとする。それが出来ない時には無視して見逃す。危険だ」

「それに私がどう関われるって言うの？」

「姉さんの愛が必要なんだ。こいつは子供の頃、実母であるるみを離れて俺の師匠でもある人の所へ養子に出された。こいつの能力はその頃から突出していた。それで師匠以外の周りの者が皆こいつを恐れた。師匠はこいつを弟子として育みはしたが、こいつの欲しかった愛を与える事は無かった。師匠自体が愛を知らなかったんだ。俺にとっては方法を学ばただけだったから別にそれでも構わなかったんだが、こいつにとっては不幸な事だった。それもこいつが選んだ状況ではあったんだがな。どっちにしても誰もこいつをそのまま受け入れようとしなかったって事だ」

私は頷いて言う。「どんな事が出来たの？」

「俺と同じ力に加え、幻を物質化出来た。その力だけは入社して来た時に俺が封じた」

「つまり、あなたが見ていたものがすべて見えるのね。人の持っているエネルギーの場だとか、心にあるものなんか」

「そうだ」

「幻の物質化って？」

「要するに式神が使えると思ってくれ」

式神。式とも呼ぶ。つまり、呪術によって作り出された、自分の思いどおりに使える僕のようなものの事だ。

私も、趣味でそのタイプの事を題材にした一つの長い物語を、もう八年書き続けているので、その為の知識として春樹や正巳が身につけた事の意味だけは判るのだ。

「冗談みたい。けど、正巳、とても寂しかったんだ。きっと式を友達にしていたのね。なのにそれをあなたは封じた・・・」

「ああ。もう少し愛を理解したら戻せば良いと思ってる。愛の無い状態で式神を使うのはあまりに危険すぎるから」

「正巳はそれについて納得してるの？」

「ああ。それは納得させた」

「でも、それって辛かったでしょうね。正巳の唯一の友達だったんじゃないの？」

「そうだ。しかし、式が怒りだとか恐怖を受ける入れ物になってしまうんだ。そしてそれが式のエネルギーになる。もう少しうちに来るのが遅かったら、どうしようもない状態まで育ってしまうところだった。要するに制御不能状態。五十嵐自身がそれを持て余す」

「師匠であるお父さんはそれを放置していたの？」

「五十嵐の父親はこいつ程力があつた訳ではない。行者としては一流だったが、愛のないものにすべての本当の意味は分からないんだ」

「恐ろしい話ね。でも、結局すべてが幻でしかないのに」

「そうだ。それが五十嵐に理解出来れば、次に進める。その為に今色んな問題をこいつが引き寄せているんだ。それを学ばなければそれは終わらない」

「でも、私に何が出来るのかしら？」

「俺にも判らない。姉さんの行動はいつも俺にとって予想不可能だから」

春樹は笑いながらそう言って運ばれて来た前菜を食べ始めた。私も、彼にならって食べ始める。

私は正巳の子供の頃の孤独を思いながら黙って次々と運ばれて来る料理を食べ続けた。春樹もその思いを邪魔しないように黙って食べる。

メインディッシュが運ばれて来た。私は突然思いつき、尋ねる。

「ねえ、あなた、味覚はどうなってるの？」

「あるよ。だって、これ、旨いから。要するにすべての感覚が肉体というベールを取り去り、研ぎ澄まされた感じだ」

「良いわね。私も脱いじゃおうかしら」

「急がなくても良いさ。後で俺の感覚を分けてやる」

「どう言う事？」

「俺の持っているものと姉さんと持っているもの、どっちも使えるってさっき言っただろう？」

「ねえ、私これから大変な役目を負ったって言う事なの？」

「そう、姉さんの書いていた龍の力だ」

『龍』私の書き続けている物語の題名。そして、私の大親友の名前でもある。

「嫌よ。私そんな大変な事したくない」

「心配するな。姉さんはいつもの姉さんでいれば良いんだ。誰も姉さんにスーパーマンを求めたりしない。ただ、姉さんが姉さんで居続ける事が姉さんの仕事」

「良く判らないわね。でも、楽しいんでしょうね？」

「もちろんだ。姉さんは俺が変わって行くのを見ているのが楽しかったって言ったよな。これから五十嵐もどんどん変わって行く。滅多に出来る体験じゃない。確かに、こいつはちょっと偏屈でやっかいな奴だが、俺よりは素直だ。それにまだ若い」

「でも、正巳は、あなたみたいに私を受け入れないわ。そんな彼に対して私に何が出来るって言うの？」

「姉さんが受け入れてさえいればそれで良い。五十嵐の問題は五十嵐が片付けるしか無い。姉さんはそれをただ楽しむだけだ」

「あなたは？」

「俺もただ楽しむだけさ。それにずっと姉さんとこうして居られる。今までの中で最高の形に変化した」

「あなたは良いわよね。もう何も無い。でも、私はまだ肉体を持つてるのよ。大好きだったあなたの暖かさや匂い、それにあなたに抱き締められる時に感じる気が遠くなるような感覚。返してよ。知らないで済んでいたのに、あなたが私に無

理矢理押し付けて、それをあなたはすべて持って行っちゃったのよ」

「判ってる。姉さんにとって一番大切なものだった。だから俺はそれを与え、そして奪ってしまったのかもしれない」

「あなたの趣味で？」

「そうだな。俺は姉さんを傷つけるのが大好きだったから。でも、大丈夫だ。いつもそばにいて抱き締めてやるって約束したろう？」

「死んだ男に何が出来るって言うのよ。正巳で代用しろなんてあんまりよ？」

「荒魂、和魂」

「何？それって前の夫・・・」

「それに俺は答えない。まだもう少しジェラシーが残ってるからな。もう少しこの状態に慣れればそれも無くなる筈・・・。けど、これは持っていた方が俺らしいかも知れないな」

「私には妬くなって言う癖に、幽霊になってもまだ妬くなんて、確かにあなたらしいわね。面白そうだから持っていれば？」

「そうだな。でも、今夜はこの体で姉さんを抱いてやるよ」そう言って笑って見せた。

「結構よ。あなたがそんな事しようとしたらすぐに落とすわ」

「そうかな？姉さんにそれが出来るかな？」

「悪霊もどき。ちゃんと落とすわ。名前を呼んで帰って言えば良いんだから。簡単なものよ」

「それで良い。とにかくこれ食ったら姉さんの部屋に行っても良いかな？俺、姉さんの入れたコーヒーが飲みたいんだ」

「不思議な幽霊。別に構わないわよ。でもあなたを連れて帰った方が良いのかしら？それとも正巳の方？」

「俺を連れて行ってくれないか？あまり頻繁に降ろしたり落としたりすると五十嵐に負担をかける。次ぎに落とすのは今日の最後が良い。これも少しづつ慣れると思うけど、今のところ本当に手探り状態なんだ」

「正巳にとっては憑いたままの方が楽なのね？」

「そう。今は俺のエネルギーで動いてるから。でも、このエネルギーを入れ替える時に結構負担がかかるんだ。それがどれぐらいのダメージのものか、どの程度で回復するのか、その辺りの事を少しづつ試して行かなくてはならない」

「ところであなた、いつ死ぬのが判ったの？」

「俺に四十代が無いのは昔から知っていた。でも、それがあの日だって言うのは姉さんと出雲へ行った後」

「じゃあ、そんなに余裕が無かったのね」

「ああ、五十嵐にとっても急な話だったし、後半年ぐらい、つまり誕生日前までは俺がやれると思ってたからそのままにしてあった問題も有ったりした。それを五十嵐一人で片付けるのは無理だし、俺と五十嵐だけでも持て余すんだ。それで姉さんに力を借りたい」

「あなたがそれをしたいのね」

「だって楽しそうなんだ」

「呆れた！」

「姉さんだってきっと楽しいはずだ」

「そう言う事にしておきましょう。だってどうせ逃げられないんでしょう？」

「そう言う事」

「でも、私の仕事の邪魔はしないでね。今はそれで食べてるんだから」

「判ってる。でも、金の問題ならメモリーの方である程度出せる。嘱託社員の扱いにすれば良い」

「アルバイト？」

「そんなものだ。時間給を出してやるよ」

「冗談でしょう？」

「本気だ。これは五十嵐も納得してる。まだ生きてた時にその件についてはちゃんと話した。篠田さん達チャネラーと同じ扱いにするように言ってある。そうすればすべて経費で落とせる」

「ちゃんと社長業もやってたのね」

「もちろんだ。社長の仕事のほとんどは金の事だからな。五十嵐もそれに関してはちゃんと仕込んである。俺が死んだ後、こいつに会社を任せる事になるのは判ってたから。こいつを預かってから、ずっと俺が仕込んだんだ。けど、愛してやる事は出来たが、こいつ自身で愛を見つけさせる事だけが出来なかった。それを姉さんにやって貰いたい」

「一番難しい事を押し付けるのね」

「一番楽しい事を残しておいてやったんだ」

「勝手な奴」私はそう言って最後のエスプレッソコーヒーを飲み干した。

春樹も食後のタバコをもみ消して立ち上がる。

「金の心配はしなくて良い」そう言って伝票を取った。

「構わないわよ。今日は私が払うから。たまには払っておかないと、悪霊に取り憑かれてしまうわ」そう言ってその伝票を私が取り返してレジへ向かう。

「酷い言い方だ。じゃあ、今日のご馳走になっておこう。次からは五十嵐と良く話し合ってくれ」

「そうするわ」私はそう答えて支払いを済ませた。

私達は春樹の運転する車で私のオフィスへ戻った。

春樹は生きていた時と同じように、エレベーターの中で強く抱き締め、口づけをした。私はそれを複雑な気持ちで受け入れた。正巳の顔に重なった春樹の顔が面白そうに笑っていた。

「私、メガネをかけた方が良いみたい」私が彼の胸に顔を付けて言う。

「俺が見えるのか？」春樹が意外そうに言った。

「ええ。正巳とあなたが二重写し」

春樹が私の肩を掴んで少し離し、私の目を覗き込む。

「本当だ。姉さんも変わりつつある」そう言ってもう一度抱き締めた。

何が起ころうとしているのだろうか？私がどう変わろうとしていると言うのだろうか？何も判らない。しかし、私はもう恐れなかった。先の判らない事を恐れる必要はないのが心の奥底まで沈んだのだろう。抵抗はするが怖れはしない。それは矛盾しているようだが、私のやり方としてそれを認めてしまう事にした。

部屋に入って灯りを点ける。そして私はコーヒーの用意をする。春樹はソファーに腰掛けてくつろいでいた。

私は淹れたてのコーヒーを持って、彼の前に仕事用の椅子を動かし、テーブルを挟んで座る。正巳の隣に座る事に気が引けたのだ。

「姉さん。いつもみたいにこっちへ座れよ」彼はコーヒーを飲みながらそう言って自分の横のソファーをたたいてみせる。私は諦めて彼の横に座り直す。

「やっぱり姉さんのコーヒーは旨い」

しばらく彼は私の肩に腕を回して、コーヒーを飲んでいて、そして突然カップを置くと立ち上がり、壁にあるスイッチで灯りを消す。そしてそのまま壁にもたれて立った。

薄暗で見えるそれはいつもの春樹の姿だった。右肩を少し下げ、背中を少しだけ壁に付けて少しうつむき加減に立つ。

私は振り向いてそんな彼をちらっと見、また目を逸らせてコーヒーを飲む。春樹が私の後ろに回り、襟元から手を入れ胸に触れて言う。

「どんな風に見えた？」

「春樹に見えたわよ」私は失礼な彼の手を掴んで投げやりに言う。

「俺の感覚を分けてやるよ」春樹はそう言って私を抱き締める。

私はやはり抵抗する。何故なら、私は春樹が死んだ事を知っているのだ。そして、この体を抱いているのが春樹ではなく、正巳だと言う事も理解している。

「姉さん。俺だって判ってるじゃないか。もっと力を抜け。拒絶すれば俺の感覚が流れて行かない」
「だって、その体はあなたじゃないのよ。正巳には正巳の好きな女性や男性と抱き合う権利があるの」
「権利か？」驚いたように彼が言う。

「そうよ。可哀相でしょう？あなたが去って、正巳が戻った時、私なんかを抱いたって思ったらすごくショックを受けるわ」

「そんな事を気にしてるのか？」

「もちろんよ。だって彼はあなたの愛人だったんでしょ？もっと彼の気持ちを大切にしておいて」

「俺は充分五十嵐を大切にしているつもりだぜ。確かに姉さんと再会してからこいつを抱きはしなかったが、こいつを拒絶した事など無かった。俺が姉さんを愛する事で、こいつもそれを理解出来れば良いとも思ってた。こいつはいつも俺に成りたがっていたんだ。そんなこいつが俺はいじらしく、いとおしかった。そして今、俺と五十嵐は一つになっている」

「それは違うわ。春樹は春樹として存在していて、正巳は正巳として存在しているの。いくら正巳が春樹に成ろうとしてもそれは叶わない事なのよ。その為に別々の体を持ち、個に別れて生まれて来たんだから」

「姉さん。俺に肉体はもう無いんだ。つまり俺は個に別れて無い」そう言って彼は力づくで私をソファーに押し倒し、口づけした。圧倒的な情熱が彼から流れ込んで来た。それはそれまでに経験したどんなものよりも強く、ピュアなものだった。私を受け入れようと受け入れまいとそれは私の中に流れ込んで来た。愛と呼ぶには強すぎる感情だった。柔らかく、暖かく、心地良いもの。それが愛のはずだった。しかし、今春樹から流れ込むものはそんな生優しいものでは無かった。自分のすべてが壊れてしまうと思える程の強さがそこにあった。

「春樹、やめて。お願い帰って」純粋な恐怖を感じた私はそう言った。

私の上で男が力無く倒れ込んで来た。放心状態の私はその重みを感じながら、なすすべもなく横たわっていた。

暫くそうしていた。男が動いた。そして、今度は正巳の意識を持った正巳の体が私を抱き締めた。

「めぐみさん。この状態でやめろって言うのは酷ですよ。僕も男なんだから」そう言って私を押さえ付ける。正巳に対して恐怖や嫌悪感があった訳ではない。それでも私は必死で抵抗する。しかし、正巳の力は私を押さえ付けていた。そして、彼の手は私の体を弄った。それは春樹のやり方とは違った。私は失敗したと思った。きっと私の不注意から正巳を傷つけてしまう。

「正巳。やめなさい」私はそう言って彼から逃れようとする。しかし、彼の腕は私を逃さない。

「どうして？梶さんなら良くって僕じゃ駄目なんですか？梶さんがあんなに愛した体。僕だって愛せるはずですよ」そう言って着ているものを剥ぎ取ろうとする。

「やめなさいってば。あなたが傷つくのよ。そして、あなたはきっと後悔する」

「違う。傷つくのはめぐみさん、あなただ。僕から梶さんを奪ったあなたが傷つくだけだ。そして、それを後悔するのもあなた」

「私は傷つきもしないし、後悔もしない。でも、あなたはきっと傷ついてしまう。だからやめなさい。いつかちゃんと愛し合えるから。今は、まだ早すぎる」

彼が受け入れられない訳では無かった。しかし、自分自身を納得させるためにも、私には抵抗する必要があった。それが私のやり方だから。

「駄目ですよ。そんな事言ってもね。僕は今あなたに復讐するんだ」そう言って彼は本気で私を犯そうとしていた。

「春樹！」私が叫ぶ。

「めぐみさん。駄目ですよ。こんな精神状態で霊を降ろすことなんて出来ない」正巳が冷たい声でそう言った。

私はもう一度心の中で叫ぶ。『春樹。私に降りて。私があなたの形代だったはずよ』

「五十嵐。なにしてる」私がそう言った。そして私の腕が私の意志と関係無く、正巳を強く抱き締めた。

正巳の動きが止まった。

「本気で姉さんに復讐するつもりなのか？」私が言う。

「梶さん?!」正巳がそう言った。

私は自分の意思をを持ったまま春樹の言葉を喋っている。

「俺はそんなにお前を傷つけたのか?俺がした事で、姉さんを傷つけなければならない程お前は傷ついていたのか?」ゆっくりと噛んで含めるような話し方だった。きっと春樹はいつも正巳に対してこんな風に話して居たのだろう。

「だって、梶さんは僕との約束を破ってこの人と会っていた。もう時間が残っていないのが判っていたのにそれを僕に出来ないで、この人とばかり会ってたじゃないですか」正巳は子供がだだを捏ねるようにそう言った。

「お前は、そんな事を恨みに思ってたのか?」優しさに満ちた声だった。

「そうじゃない。初めてこの人に会った時に、その意味は分かりました。でも、それなのに梶さんを受け入れようとしなはいこの人が僕は許せなくなったんです」春樹の穏やかな言い方で少し自分を取り戻したようだ。

「それで、こんな事をしようとしているのか?」春樹はもう一度優しく問う。

「そうです。それに、中途半端なところで梶さんが居なくなるから・・・僕だって男です」

「ごめんなさい。私が悪かったわ。正巳が男だって忘れてた」私の意識で私が言う。

「めぐみさん?」正巳が驚く。

「五十嵐。姉さんとなら俺と一緒にいる事が出来るんだ。判るか?これが相手を受け入れると言う事だ。確かに姉さんは色々抵抗する。しかし、本当の意味で受け入れると言うのは、体を貸すことじゃない。こうして同じ体に違う人格を宿らせる事が出来る。前にお前に間違っ降りた時とは全く違うんだ。俺も今までこんな方法があるなんて気づかなかったが、姉さんに言われて降りてみて判った。お前になら見えるだろう?今俺のエネルギーと姉さんのエネルギーが重なって存在しているのが」

「見えます。でも、僕は、どうしたら良いんですか?」正巳は混乱していた。

「抱いて欲しいか?」春樹の強い意志が言う。

「嫌よ。私がいるところでそんな事しないで」私が即座に抗議する。

「やめましょう。そんな気に成れなくなりました」正巳が首を振りながら言った。

「ごめんなさいね。本当に私が悪かったわ。許してくれる?」

「はい。僕もいけなかったんです。復讐なんて言葉を使ってしまって・・・」

「そうだな。五十嵐は本当はそんな事をしたかった訳じゃない。ただ、その言葉を使った事によって自分の気持ちを違う方向へ導いてしまったのが間違いだった」

「ねえ、私、服を着ても良いかしら?このままじゃ私の方が変な気分になっちゃう」

「願っても無い事ですね。このままいきましょうか?」そう言いながらも正巳は私を放した。

「嫌よ。セックスする時にはもっとロマンチックにしたいわ。それにこんな変な形のセックスなんて絶対嫌」私はそう言って身繕いを整える。正巳も自分の服を直した。

「姉さんはちょっと古風なところもあるからな」私が気を抜いていたところを見計らって春樹が私の口を使って言った。

正巳が笑いながら言う。「こんな状態って、本当に慣れるんですかね?」

「慣れなきゃ頭が変になっちゃうわ。それとも、この悪霊を成仏させてしまう?」

「姉さん。俺は悪霊じゃないって。それに成仏する必要も無い」

「でも、この状態ってちょっと不便ね。近いうちにあなたの形代を作りましょうよ。多分、正巳と私の思いを合わせれば出来ると思うわ」

「俺の形代?」

「そうよ。どうせすべてが幻。幻の中にもう一つ幻を作り出す事ぐらい出来るはずよ。それに、正巳はずっとそれをしていたんでしょ?」

「俺が封じた奴か?」

「今の僕には出来ませんよ。もう式を使うのは・・・」

「違うわよ。何かをさせる為のものじゃない。ただ、春樹がそこに居るように見れば良いの。だって春樹はちゃんと

存在している。ただ、体が無いだけでしょう。それに、言葉を使わなくても会話が出来ると言ったじゃない。だから発声器官も必要ない。多分、簡単に作れると思うわ」

「なるほど。でも、それだと抱いてやれないよ」

「結構よ。私が二人分話すより楽そうですもの。きっと今の状態を外から見たら頭の変なのが二人で三人分話してるって見えるわ」

「僕にはちゃんと見分けがつかますよ。めぐみさんの時と梶さんの時では色が違うから」

「そう、あなたも見えるのね。私には分からないわ」

「違う。姉さんにも見えるさ。見える事を認めたくないだけ。でも、俺が姉さんに憑いている限り、見る必要もないけどな」

「まあ、そんなところね。でも、近いうちにきっと作ってあげる。私が一番可愛って思えるあなたの姿をね」そう言って私は縫いぐるみにでもしようかと思って笑って見せた。

「なんだか、嫌な予感がする」春樹が冗談めかして言う。

「大丈夫よ。ちゃんと赤い服を着せておいてあげるから」

「姉さん頼むよ。熊だとか猿だとかって言うんじゃないだろうな」

「じゃあ、ウサギなんかどう？」

正巳が声を上げて笑った。「あなた達って本当に面白いですね。本当に愛し合ってたんですか？なんだか仲が良いのが悪いのか分からなくなって来ました」

「愛し合ってたのよ。ほんの少しの間だったけど」私が言う。

「いや、ずっと何度も生まれ変わりが愛し合ってたんだ。今、姉さんがこんなふうなのは、俺がずっといじめ続けたからその仕返しだ」

「愛し合ってたのにですか？」正巳が問う。

「そうだ。俺はいつも姉さんを苦しめる事で愛を表現し続けていた。それを受け入れる事で姉さんも俺を愛していた。それだけの事だ。愛には色々な形がある。お前はこれからそれを楽しみ、学ぶんだ。そして、本当にそれが判った時、ちゃんと姉さんを抱いてやってくれ。それを姉さんはきっと喜んでくれる。今でも、確かに姉さんはお前を受け入れている。俺がお前を愛したようにな。しかし、姉さんの愛は今のお前には理解出来ない。つまり愛し合う事が出来ないんだ。だから俺は止めた。さっき姉さんが言ったように、姉さんは傷つきもしないし、後悔もしない。それは本当だ。姉さんはただありのままの結果を受け入れる事が出来るからな。姉さんが抵抗したのはお前を受け入れていないからじゃない。そうする事が、姉さんが姉さんでいる為に必要な事だからだ。ありのままを受け入れると言うのは、自分自身も受け入れると言う事だ。けれどお前にはまだそれが出来ない。お前はあのまま続ける事によって間違いなく後悔し、傷ついたらろう。しかし、姉さんはどんな結果であろうとその中に隠されている意味を見つける事が出来る。だから自分は傷つかないが、お前は傷つくと言ったんだ。俺は俺の愛したお前が傷つくのを望まない。その為に姉さんとお前を繋いだ。それが俺に出来るお前への最大のプレゼントだったんだ。楽しんでくれ。お前の人生を」

「梶さん！僕をそんなに愛してくれてたのに、何故僕を置いて行ってしまったんですかあああ・・・」正巳がそう言って泣き出した。

私はそんな彼をただ抱き寄せて泣かせる事しか出来なかった。私は春樹を失ってから三日三晩泣き続けた。そして、肉体の無い春樹の幻に抱き締められて立ち直った。正巳はそれも出来ずに一人でそれに耐えたのだ。辛かっただろう。悲しかっただろう。しかし、それは正巳の問題でしか無いのを私は知っていた。

肉体のある幻と肉体の無い幻。結局春樹は私にとって幻でしか無いのだ。いや、春樹だけではない。すべてが、自分自身の肉体でさえ幻。

「泣いても良いのよ。春樹もいつもこうして泣いていた。私も彼も泣く事ですべてを解放したの。だから、あなたも気の済むまで泣きなさい」私は正巳の頭を撫でながらそう言った。

正巳は泣きじゃくりながら言う。「めぐみさん。僕・・・」後は言葉にならなかった。

私の中にいとおしさが満ちて来た。『姉さん。俺がこいつに持っていた感情がこれだ。だからもう妬くな』春樹の思いが私の中に広がった。

私も心の中で言う。『春樹が私に持っていたのはどんなだったの？』

春樹がそれに答えるように感情を流し込んだ。それは私が先程恐れて彼を落としたものと同じ、強く激しい愛の感情だった。心が焼けただれてしまう程の強さだ。しかし、私はもうそれを恐れなかった。何故なら、それは春樹のものではなく、私の内にある感情そのものを、私が春樹と言う幻で表現しただけだと言う事を理解したからだ。それで、それをそのまま受け入れる事が出来るようになっていた。

『姉さん。ありがとう』春樹の思いが伝わった。

『どう致しまして』私は心の中で笑って見せた。

正巳は私の腕の中でまだ泣き続けていた。

「もしもし。めぐみさん。昨夜はすみませんでした」

「ああ、正巳。もう大丈夫？」

「はい。随分楽になりました。ありがとうございます」

「それは良かったわ」

「実はお願いがあるんです。今日、時間を貰えませんか？」

「構わないけど・・・」ちょうど急ぎの仕事が無かったので私はそう答えた。

「良かった。午後二時過ぎにPホテルの1012まで来て貰えませんか？」

「もしかしてチャネリング？」

「そうです。ちょっと助けて欲しいんです」

「私に何が出来るの？」

「実は梶さんの言い付けで・・・」

「春樹が何て？」

「良く分かりません。でも、どうしてもめぐみさんに来て欲しいって感じるんです。クライアントとの約束は五時と八時の二件です。それまでにしないといけない作業があるのでそっちの方にお付き合い頂きたいんです。もし、お時間が許すようでしたらチャネリングのサポートもお願い出来るといいんですが」

「良く分からない。でも、きっと何か意味が有るんでしょうね。何も出来ないとは思うけど、一応二時に行くようにするわ」

「助かります。じゃあ、お待ちしていますので」正巳は、そう言って電話を切った。

私に何が出来ると言うのだろうか？全く分からない。しかし私には自然に流れて行っていると言う確信が有った。このまま流れに乗るしか無いようだ。私は出掛ける用意を始めた。

フロントで断って、指定された部屋の前まで行くとドアが少し開いていた。私はチャイムを鳴らして返事を聞かないまま中に入る。

「正巳、居るの？」そう言って中を覗き込む。

部屋の中を正巳は何かぶつぶつ言いながら変なステップで歩いていた。

「臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前 臨、兵、闘、者、皆、陣、列、在、前・・・」

反問、禹歩の法。そして唱えているのは九字。多分この場を清めているのだ。知識としては知っているが、実際に見るのは初めてだった。

私はドアを静かに閉め、壁に寄りかかってそれをじっと見つめる。すると面白い事に正巳の足跡が少し光っているのが見えた。それが部屋の中を縦に四本横に五本走り、そしてさらにその上に重なるように大きな星形を描こうとして、最後の一本を引いている所ようだった。

「・・・列、在、前」正巳がそう言って最後の一本を引き終えた。

私は壁を離れ、彼の作った線を踏まないように星の中央に進む。

「ドーマンセーマン。上手に出来たわね」私は、その線を指さしながら笑って言う。

四本と五本の線で作られた升目が、陰陽師芦屋道満の使った魔よけでドーマン。そして五本の角を持った星形が、阿倍晴明が使った晴明桔梗紋と呼ばれるセーマンだ。

「ありがとうございます。めぐみさんにも見えますか？」

「ええ、とっても不思議な事にね。でも、私もそれについて考えるのはやめたわ。色んな事が変わって行く。変化は恐れるべきものじゃないって私の龍が言ったし・・・」

「そうですね」そう言って正巳も笑って見せた。

「私、どこに座ればいいのかしら？」

「すみません。暫く此処はこのままにしたいのでベッドルームの方へお願いします」正巳が奥へ繋がるドアを開けて言った。

私はまた彼の引いた線を踏まないようにそのドアに向かう。

「めぐみさんなら踏んでも大丈夫ですよ。これが機能するのは悪霊だけですから」

「じゃあ、春樹は駄目ね」私はそう言って笑って見せた。

「俺なら大丈夫だぜ。姉さんの体を着てるからな」春樹が突然私の口を使って言った。

「あなた、また来たの？私、呼んで無いわよ」私が私の意志で言う。

「いつも一緒だって言っただろう？姉さんに降りる時は、名前は必要ないんだ」春樹が言った。

「梶さん。これで良いですね」正巳が尋ねる。

「ああ、床はな。でも、このままだといつまで置いても清まらないぞ。お前には気の澱みが見えないのか？」

「どこですか？僕には見えません」

「しょうがない奴だ」春樹はそう言って正巳を手招きする。正巳がそれに従って私の側に来た。春樹の意志を持った私の腕が正巳を引き寄せ、後ろを向かせると両肩を掴む。

「ひふみよいむなや こともちろらね しきるゆるつ わぬそをたはくめか うおゑにさりへて のますあせえほれけフルの社に座す大神 祓い給え 清め給え」

春樹が、低い、空気を揺るがすような声で一音づつ丁寧に発音しながらそう言った。そして正巳の肩を一度強く打って手を離れた。古神道の言魂による祓え言葉。

「お前が背負っていたんだよ」

私の目に正巳の引いた線が輝きを増すのが見えた。そして、正巳自身も初めよりも透明感を帯びたのを感じた。

私は正巳が言ったようにベッドルームに入り、きちんとメイクされたベッドに腰掛ける。

「ねえ春樹、今日も私に憑いてるつもり？」私が俯いて尋ねる。

「面倒か？」

「ちょっとね。会話が結構面倒なのよ。それに私に変な事させるし」

「ひふみの祓えのことか？だったらチャネリングを始めるまで五十嵐に降りよう」

「そのままチャネリングにも居てもれえませんか？」正巳が言った。

「駄目だ。俺がやっちゃったら何もならないだろう。だから、時間までお前を貸してくれ」

「分かりました」正巳はそう言ってベッドに横たわり力を抜く。

「春樹、正巳に降りて」私がそんな彼に言う。

三分程そうしていて次ぎに起き上がった時には春樹が宿っていた。

「春樹？」私は一応確認する。

「ああ」

「どうして正巳だとそんなに時間がかかるのに、私の時は突然なの？」

「これでも早い方なんだぜ。五十嵐と俺の波長が似てるから。それとお互いを良く知っていると言う事もあるし。姉さんの場合が特別なんだ。龍で慣れてるから」

「あなたに違いは有るの？正巳の時と私の時で」

「ああ、五十嵐の時はちょっと注意が必要だ。こいつは俺に頼り過ぎてるから、自分を失う可能性が有る。それをちょっとカバーしていなければならない。でも、姉さんの時は全然その必要がない。生きていた時と何も変わらない意識でいられる」

「そんなものなの」

「そう言う事」

「ところで今日はどんな御用で呼ばれたのかしら？」

「最近こいつのマッチングしたチャネリングで問題が出てるって言っただろう。それをちょっと助けてやって欲しい。多分今日は、昨夜姉さんのエネルギーを貰ってるからそんなに酷い事にはならないと思うんだが、もしかしたらそのエネルギーが反対にできるかもしれない」

「どう言う事？」

「俺が出雲で姉さんのエネルギーを見て勘違いしてしまったみたいに、力に頼ってしまう可能性が有るんだ。それに、今日だってまた変なものを憑けて来てただろう？」

「何故？場所を清める方法を知っていて、それが出来るのに・・・」

「五十嵐が知っているのはその方法だけだからだ。五十嵐の親父は、神道、古神道、修験道、陰陽道、密教などの呪術の部分を中心に修行をする行者だった。現世利益の一番手取り早い方法を知るには持って来いだ。だからこいつも形ややり方は何でも知ってる。でも意味が本当に理解出来て無い。それは習って分かるものじゃないからな。それだと弱いものになら通用しても五十嵐よりも強いものには通じない。その上こいつは感応力が強すぎて、気づかない内に色んなものを拾ってしまう」

「でも、それは正巳の魂が必要としているからでしょう？」

「違うな。それをクリアーする為にその力を持って来ているんだ」

「捨てる為にわざわざ持って来るように？」

「そう言う事。でなければこいつは、俺も姉さんも作り出しはしなかったはずだ」

「なるほど。納得出来る意見だわ」

「俺は五十嵐のやり残した浄化をしてしまうから、姉さんは少し休んでいてくれ」

春樹はそう言って外の部屋へ出て行った。

私はベッドに寝っ転がって目を閉じた。一昨日の徹夜の後、昨夜の彼らの来訪でかなり睡眠不足の状態だ。今日はゆっくり寝ようと思っていたのにまた呼び出されてしまった。

睡眠に引きずり込まれる寸前の私の意識に、春樹が隣の部屋で空間を清めている風景が映った。指を剣のように使い、息吹と声によって隅々まで彼の気を行き渡らせて清める。そして、最後にその自分の気をすべて引き取って何も無い状態に戻した。何も無い。つまりそれが神の状態だ。不思議な光景だった。先程正巳の引いた何本もの線もすべて消え去った。それを見た事によって私は睡眠に入れず、妙な覚醒感の中を浮遊していた。

「姉さん終わったよ」春樹が戻り、私のとなりに腰を下ろしてそう言った。

「綺麗になったわね」私は目を閉じたまま言う。目を閉じていれば隣にいるのは紛れも無く春樹だ。

「見えるか？」

「ええ。あなたのせいで色んな事が出来るようになった」

「それが俺の持ってた力だ。元々持っていた訳でもないけどな。姉さんとの出会いでそこまで完成したんだ。それで勿体ないから肉体を捨てる時に姉さんに預けた」

私は驚いて起き上がり、正巳の顔をした春樹に言う。「じゃあ私、前世も見えるの？」

「ああ」正巳に宿った春樹が肩を抱いて言った。

「冗談じゃないわよ。私そんなの嫌よ」私は思いきり大声で言った。

「心配するな。俺の前世に関してはすべて終わってる。だからそれが出る事は無い。それと、姉さんが望んだ事だけしか見えないよ」

「何故？あなたがあんなに苦しんだ事を私に押し付けるの」

「だから大丈夫だって。姉さんはもう何にも苦しめられない。楽しむ為に必要なものだから姉さんに預けただけだ。ほら、目を閉じてみなよ。それでも見えるだろう？」

私は言われたように目を閉じる。頭の中のスクリーンに、春樹が立ち上がってバスルームへ行くのが見えた。確かにそれは春樹で在って、正巳では無かった。目を開けるとやはり正巳の姿をした春樹がタオルを手に戻って来るのが見えた。彼は私の前に立ち、屈み込んでそのタオルで私に目隠しをする。そして言った。

「そのまま隣の部屋まで行ってみろよ」

私はそっと立ち上がる。辺りを探ろうと両手を突き出した。すると私のスクリーンにその両手が映った。私は自分の手をタオルで目隠しした目の前に広げる。

「嘘！何これ？」

春樹は黙って私の前に立って歩き始める。私は彼の背中を見ながら歩く。春樹が振り向いて引き寄せ、言った。「どうだ？俺の仕事は？」そう言って私に先程清めた部屋を見せる。頭の中のスクリーンに、来た時に見た部屋とは比べものにならない程清浄な気に満ちた部屋が写った。すべてが透明感を帯びた光りを放っている。

「完璧ね」私が言う。

春樹が後ろから抱き締め、私をのぞき込むようにして言う。「俺の姿も見えるか？」
私は彼の腕を解いて振り返り、彼を見る。「見えるわよ。生きていた時よりももっと素敵なあなただわ」

「それは良かった。悪霊には見えないか」

「ええ、でもこれはどう言う現象なの？」

「光を使わずに、ものが持っているエネルギーを直接感じて、頭の中で再生して見ているんだ。原理的には目で見るのと同じ事だ。目から入った光の信号を脳で再生して見ている訳だから。姉さんが望めば、そのものが持っている記憶も再生出来る。これはちょっと説明しにくい現象だ。前にも言ったように、物や場所に刷り込まれた信号、つまり記憶を再生するための装置を持ったって言う感じ。もちろん命のあるものも無いものもだ。俺が持っていた力だよ」春樹は淡々と説明した。

「でも、これからの私に本当に必要な力なの？私はこの力を使うべき人生を歩くの？」

「今までに不必要なものがやってきた事があったか？」

「いいえ」私は即座にそう答えた。

「だったらそのまま受け入れろ。何も恐れる必要は無い。姉さんの見たくない物は俺が消してやるから」

「そんな事も出来るの？」

「ああ。スイッチを切れば良い。きっと姉さんは血だらけの幽霊なんかは見たく無いんだろう？」

「もちろんよ。そうしてもらえると有り難いわ。あなっただって優しいところもあったのね」

「それはどうも」彼はそう言って照れ笑いを浮かべた。

「本当に生きてみたい。幽霊の認識を改めないといけないわね」

「だから俺は悪霊でも、幽霊でも無いって」

「じゃあ、何なのよ」

「俺のような存在を表現する言葉は無い。きっと今まで誰もこの形を望んだことがなかったんだろう」

「守護霊とか精霊とかって言うのでもないのね」

「多分な。大体幽霊って言うものは、物や場所に焼き付けられた生前の思いだ。その恐怖のエネルギーが極限まで達して、その思いのエネルギーが一つの意志を持ち、形や力を持ってしまったのが悪霊。一つの方向性しか持ってないから総合的に考えたりは出来ないんだ。それに守護霊とか精霊っていうのは宗教的な意味合い、つまり絶対的な神的存在に依存するような意味を帯びている。けれど俺は姉さんを守ろうと思って憑いている訳でも無いし、姉さんに影響を及ぼそうと思って憑いている訳でも無い。ただ、一緒に楽しみたいだけだ。誰も他人の問題に介入するなんて出来ないからな」

「勝手な事言って。でも、それは真理だわ。それに私を何から守るかが問題だものね」

「そうさ。誰も、何も、姉さんの人生を犯す物なんて無い。それはすべての人に言える。生命の危機から守るって言っ

ても、そこまでの命しか持って無い者にはどうしようもないし、生きる必要のある奴はどんな事をしても生き残るものだ。それに、死んでる俺が言うのも何だけど、死んでるって結構楽しい状態だ」

「説得力があるわね。人は決して他人の楽しみを奪ってはいけないって龍も言ってた」

「そう言う事。姉さんの気持ち悪い物を見せないぐらいの事なら介入にはならないと思うし、俺だって出来ればあまり見たくないからな」

「要するに、あなたは私の肉体を使って楽しむ。つまり、私の気持ち悪さはあなたの気持ち悪さでもあるって言う事ね」
「はい、正解。だからこうやって姉さんを気持ち良くすると、俺もすごく気持ちが良いつて言う事」そう言って抱き締め、口づけをした。私もそれに答えて彼の首に腕を回す。

「大分慣れたな」春樹が言った。

「肉眼を使ってないからよ。でも、目で見ちゃうとやっぱり駄目。だってあなたの体じゃないんですもの」

「でも五十嵐は俺に似ているだろう？」

「ええ、一番初めに会った時、あなたの若い頃に似てるって思ったわ。でも、正巳の方が品の良さがあるけどね」

「姉さんは不良の俺しか見て無かったからだ。品の良い不良なんて誰も相手にしてくれないだろう？」

「それはそうね。でも、私は好きだったわよ。あなたの若い頃って。ただ、深入りするの怖かったけど」

「五十嵐は怖くないか？」

「ええ、ちょっと不思議なところが有るけど、怖くは無いわ」

「愛せそうか？」

「多分。でもあなた、正巳との事には妬かないの？」

「ああ」

「でも、元夫にはジェラシーを感じるのね」

「それは、姉さんの旦那が姉さんを俺と同じように愛してるからだ。ただ表現の仕方が違うだけで」

「荒魂和魂。あなた自身に嫉妬を感じているの？」

「そうなるな。その点五十嵐は安心だ」

「どうして？」

「ステージが違うんだ。つまり居る場所の事。それでも、五十嵐もきっと姉さんを愛するようになるだろう」

「変なの。私には良く分からないわ」

「分からなくて良い。とにかく五十嵐を受け入れてやってくれ」

春樹はそう言って私の目隠しを取った。目の前にいたのはやはり正巳の肉体だった。

私は静かに彼に語りかける。「正巳。あなたとても素敵よ。決して化け物なんかじゃない。とてもきれいな顔をした人間の男」私はそう言ってそっと口づけする。

春樹は何も言わずにそれを受け入れていた。

私達はまたベッドルームに戻ってベッドに腰掛ける。

「ねえ、春樹。これから私がしなきゃいけない事を教えてくれない？」

「ああ、そうだな。五時前になったらチャネラーとクライアントが来る。だから四時半頃に俺は五十嵐から離れる。チャネリングの手順は五十嵐がちゃんと知ってる。前に篠田さんとやった時とたいして変わらない。俺の代わりに五十嵐が座って、姉さんの代わりにクライアントが座る。今日のチャネラーは佐々木って言うおやじだ。彼の波動は篠田さんよりも大分粗い。多分、クライアントは前世のリーディングを要求するだろう。それに対してチャネラーが『愛』の存在になるよう要求して、それがうまく行ったら質問に答える。姉さんと篠田さんの時には既に愛の存在だったからそれは必要なかったが。その後、クライアントが色んな細々した事を質問して、チャネラーがそれに答える。そう言う段取りだ」

「正巳は何をしているの？」

「ずっとチャネラーにエネルギーを送り続ける。篠田さんレベルまで行くと、チューニングの時以外それはほとんど必要

ないんだが、今日のチャネラーなら少し手助けがいるだろう」

「私は？私は何をすれば良いの？」

「姉さんはこっちの部屋で五十嵐に意識を集めていてくれ。さっき俺が浄化しているのが見えたように多分五十嵐の姿も捕らえられるから」

「それを五時からと八時からの二回やるのね」

「出来るか？」

「多分。それにあなたが憑いててくれるんでしょう？」

「そうだ。でも、俺は何もしないよ。姉さんの力だけでやる」

「出来るの？私に」

「出来なきゃ失敗するだけだ。それなりに面白い」

「勝手な奴ね」

「心配要らない。姉さんのパワーは、俺なんかよりずっと凄いんだ。だから俺が憑いてても平気なんだよ。やり方は姉さんがちゃんと知ってる。俺は姉さんの体に隠れて楽しむだけさ」

「呆れた」

「きっと楽しめる。最悪の状態でも命を失うだけだ」

「あなた、それって凄い事じゃないの？」

「そうか？」

「私にはそれ以上酷い状態を思い浮かべられないんだけど・・・」

「魂を失う。それが本当の最悪だ」

「そんな事があり得るの？」

「ある。今の姉さんにはあり得ないが、五十嵐は失う可能性を持っている。それで姉さんに助けてもれたいんだ」

「もう少し説明して」

「魂を失うと言っても、それが無になると言う事じゃない。無になってしまえばそれに越した事は無いんだが・・・。魂が恐怖や恨みに縛られてそのままフリーズ、凍結状態になってしまう可能性があるんだ。要するに、魂ではあるが、魂として機能しない状態を指す。そうなればもう、愛の波動がおこらない。これから先、いつか姉さんもその状態の魂に出会うかもしれないが、もしそうなってもそれを恐れないでくれ。恐れるとそれにエネルギーを取られてしまう。そいつらはエネルギーを奪うだけでそれを何にも利用しない。ただ奪う事がそいつらの喜びなんだ。そして、そうなってしまうとこっちの魂の力がどんどん消耗して愛する事が不可能になる」

「魂にとって愛ってそんなに大切な物なの？」

「それを姉さんの龍がいつも言い続けているんだろう？」

「そうだったわね。でも、私にはまだ、それがどう言う状態なのか、どう言う意味を持っているのかが分からないの」

「その為に今の幻を姉さんが作り出した。姉さんの言った練習問題付きのテキスト。テキストの部分は終わってる。後は練習問題をこなす事によって、知っている事を確認するんだ」

「今の会話を正巳は分かっているんでしょう？この会話で正巳に恐怖が刷り込まれたりしないの？」

「大丈夫だ。五十嵐は今の会話を理解していない。今俺と姉さんが交わしている会話は俺達のステージで成立している。五十嵐はこのステージにいないから」

「それも分からない」

「周波数が違うんだ。だから、今の会話は姉さんが龍と話す時に使っている周波数だと考えてくれ。話しの内容によって周波数が変わる。それは姉さんが龍と会話する時に身につけたものだ。前に『誰かが自分自身に疑問を持っている時に自然にそれに答えてしまう』って言ってたように、自然にチューニングされて、その周波数にある知識を引き出すって言う事だ。そしてそれは今の五十嵐が使える周波数ではない。だから受信出来ない。たとえ受信したとしても意味が分かる状態では聞こえないだろう」

「後でどんな風だったのか聞いてみよう」

「それが良い。でも、俺が姉さんを抱いたり、いとおしく思ったりする事はすべて五十嵐に分かる。その部分はとても肉体の波動に近い周波数だから。けれど、俺の本当の愛の波はこいつには分からないだろう。あれを受け入れられるのは姉さんだけだ」

「痛かった。そして怖かった。すべてが焼き尽くされるような熱さで、なにもかもが潰されてしまう程強かった」

「でも、姉さんはちゃんと受け入れてくれた」

「私の中にあるもので作った幻ですもの」

「そうだな。それを知っている事が姉さんの本当の強さだ。さあ、そろそろお客が来るぜ。楽しもう。姉さん俺を落としてくれ」

「落としても私の方へ来るだけなんでしょう？」

「そうだ。それがこっちでの法則だから。けど、普通は波動を止めて無の状態に戻るんだ。運動し続けるには依代が必要だから。要するに魚にとって水が必要なように活動を保護する場所が必要なんだ。俺にとってはそれが姉さんのエネルギーの場って事」

「じゃあ私からあなたを落とす事は出来ないの？」

「いや、姉さんが俺を必要としていない時には俺も活動を停止した状態。つまり、無。姉さんが俺を必要とした時だけ活動する。姉さんの龍と同じだよ」

「やっぱり悪霊みたいな気がする」

「まあ、良いじゃないか。愛してるよ」

「分かった。春樹、帰って」私はそう言った後、彼にそっと口づけする。

自分を取り戻した正巳が言う。

「最後のキスは僕にですか？ 梶さんにですか？」

私は笑って答えない。

「このまま梶さんにこの体を貸し続けたら、僕の体がめぐみさんを覚えてしまいそうです。その上、梶さんが溢れるような愛情を持って触れるものだから……。僕が愛しているのか梶さんが愛しているのかが分からなくなりそう。それとめぐみさん、僕の事『化物物じゃない。とても綺麗な人間の男だ』って言うてくれましたよね。そしてあの時のキスはあきらかに僕へのものだった。めぐみさんは暖かくて柔らかくて心地良い」

「それが愛の感覚よ。龍が一番初めに教えてくれたの。でも、春樹のはもっと痛かった」

「痛いって？」

「あいつ、力が強すぎたの。息が止まるかって思うくらい強く抱き締めた。私はいつもそれにギブアップ宣言をしたのよ」

「そう言えば、梶さんが降りた後、僕の腕が疲れたりしますよ」

「ウソでしょう？」

「はい」正巳はそう言って笑って見せた。

「もうじきお客さんが来ます。サポートお願いしますね」

「やり方は春樹が教えてくれたわ。そう、あなたの隣の部屋へ行ってご覧なさい。春樹が完璧に清めてたから」

「覚えてます。あの方法を僕も身につけないと。僕も梶さんぐらいの力が欲しい。僕には最後に全部引き取るのがうまく出来ないんです。やり方は同じなのに僕と梶さんでは結果が違うんです。そのせいで問題が続いてたのかな」

「多分違うわ。だって春樹だって年末にあなたと同じ状態を招いてたもの。でも、もしかしたらあの後最後の仕上げを覚えたのかもしれないわね。どっちにしても場所は入れ物でしかないわ。問題はあなたが作り出しているの。あなたがそこから何かを学ぼうとしてね。だから、そんなに嫌がらないで」

「でも、凄く悍ましいんです。めぐみさんも見れば分かります」

「そうね。でも、本当にそれを作り出すのはあなたなのよ」

『ジーッ、ジーッ』電話が鳴った。

正巳がそれを取って言う。「はい。こちらへ来てもらって下さい」

電話を置いて私に言う。「チャネラーの佐々木さんが来られました」

「私、ご挨拶した方が良いのかしら？」

「いえ、此処で隠れて下さい。後で紹介します」

「分かった。健闘を祈るわ」

私の言葉に正巳は笑って見せると、ベッドルームを出て、扉をきちんと閉めた。

高層ホテルの一室で、三人が正三角形を描いて座っているのが見える。

一人の男は首を深く項垂れ、大きく静かな呼吸を繰り返している。彼の名は佐々木武司。メモリーコーポレーションの契約チャネラー。もう一人は五十嵐正巳。

正巳はチャネラーの呼吸に合わせて自分の呼吸をコントロールしていた。

そしてもう一人の女性が相談者のようだ。彼女はただ不思議な成り行きに興味を持って目の前の二人の男を交互に見ている。

十五分程その沈黙が続き、チャネラーが顔を上げた。それを見て正巳が声をかけた。

「アイリーン、ご機嫌はいかがですか？」

「頗る良いですよ。今日は何の話に呼ばれたんですか？」

「ここにいる女性の質問に答えて頂きたいのです」そう言って相談者の女性を指し示した。その後正巳はすべての意識をチャネラーに集中した。

「はじめまして。私はアイリーンです。あなたの名前は？」

「私、西坂美智子と言います」

「何についてセッションしましょうか？」

西坂美智子と名乗った女性は、暫し首を項垂れ、そして覚悟を決めたように顔を上げると語り始めた。

「私、もうすぐ三十歳になるのに、一度も恋愛をした事が無いんです。私は一人娘で、家を継がなくてはなりません。家の者も結婚を待ち望んでいますし、私も家を継ぐ事を望んでいます。でも、私、男の人が怖いんです。子供の頃からずっと。父が早くに亡くなったせいもあるのかも知れませんが。学校も女子校でした。相手が憧れの先生であっても、一対一でいると息が詰まりそうな感じがして、胃の中のものに戻してしまいそうになりました。グループでお付き合いした事もあるにはあったのですが、やっぱり二人だけで会う事が出来なかった。ただの男性恐怖症なののでしょうか？それとも何か前世であったのでしょうか？」とぎれとぎれながら彼女は誠実そうに語った。

「分かりました。あなたの前世を知りたいのですね」アイリーンと名乗った意識は暫く黙り込んだ。そして西坂美智子と名乗った女性に言う。

「愛を感じて下さい。自分自身が愛だとイメージして、すべてを愛に委ねて下さい」

西坂美智子はそう言われて目を閉じる。そして深く頭を垂れて愛をイメージしていたが、それがなかなか巧く出来ないようだった。

「愛と言うのが良く分からないんですけど・・・」彼女が小さな声で言った。

「柔らかくて、暖かくて、心地よいものを思い浮かべて」アイリーンがアドバイスする。

それで彼女にも巧くイメージ出来たようだ。

「さあ、言って下さい。私は愛だ。私は愛以外の何ものでもない」と張りのある声でアイリーンが言った。

西坂美智子が言う。「私は愛です。私は愛以外の何物でもありません」

「OK では始めましょう」ととても明るい声でアイリーンと名乗った意識がそう言った。

正巳はただ黙って佐々木武司にエネルギーを送り続けている。

私は目を閉じてずっとその光景を見ていた。正巳のエネルギーは今のところ問題無いようだ。

「辛い思いをしましたね」アイリーンが女性に向かってそう言った。

アイリーンと名乗った意識体は、その女性に影響を及ぼしている前世での因縁や出来事を次々に語った。それを聞いた女性は涙を流していた。そして最後に語ったのが次の物語だった。

「酷い飢饉がありました。それであなたは最後に産んだ子供を餓死させてしまった。そして、あなたの夫は生き残る為に

その子供の肉を食った」

アイリーンがそう言った途端に正巳のエネルギーが大きく動揺した。正巳とチャネラーの間にあったエネルギーの流れが大きくなる。

それは正巳自身の子供の頃の恐怖と孤独。そして、それを与えた大人に対する怒りの感情。私は背中を丸めて泣きながら誰かを求めている子供の姿を感じた。

『まずい』私は思った。私は私のイメージの中でその子供を抱き締める。

『大丈夫。それは幻。あなたはもう大人で、今そこに居る。そして春樹も私もあなたの傍に居る』

その子供は私の腕の中で私の胸を叩きながら暫く泣き続けた。正巳のエネルギーが少し落ち着いた。チャネラーの方もそれでまた持ち直してリーディングを続ける。

「あなたはどうしてもそれが許せなかったんですね」アイリーンが言った。

女性は泣きながら頷く。

「でも、その時代、生きると言う事はそれほど厳しいものだったのです。あなたの夫だった男性も、あなた以上に傷ついたので。彼は残った家族を守らなければならなかった。まだ子供が三人残っていたし、老いた両親もいた。自分が死ぬ事はすべての家族の死を意味する事を知っていたのです。許しなさい。本当に癒されなければならないのは、夫だった魂の方です。あなたはただ、自分を許す事を学ぶために来たのです」

「自分をですか？」女性が尋ねた。

「そうです。あなたは自分を許す事によって、他人を受け入れられるようになります。それが恋愛に繋がり、結婚へ導く。あなたの中で恋愛は、結婚に繋がり、それは子供を持つ事に繋がっているのです。それが前世の不幸な結果と結び付いて、あなたは恐れている。しかし、あなたはその時、その夫に愛されていたのです。そして守られていた。自分が愛される事を許しなさい。もう、そんなに不幸な時代ではないのですから。今の時代なら、子供を持つ事が恐ろしければ、作らない方法も有ります。その一つの恐怖のためにすべての喜びを放棄する必要は無いのです。それに、あなたは大丈夫です。今日此処で、愛に身を委ねる事が出来ました。だからちゃんと恋愛も出来るし、結婚も出来ます。そして、きっと子供も立派に育てられるでしょう。でも、その子供を家の犠牲にするのだけはやめて下さいね。今の時代、肉を食らう事はなくても、それなりに犠牲を強いる事がありますから。今度はそれからあなたが子供を守れば良いのです」

それを聞いて女性は声を上げて泣き始めた。

泣き終わった後、出会いの方法やタイミングなど、細々とした事を彼女は相談し、アイリーンはそれに答えた。

セッションはチューニングの為の前後十五分づつを除けると実質一時間程だった。正巳のエネルギーも一度動揺しただけで、後は安定してチャネラーに流れ続けていた。

『なんだか、辛い話を聞いてしまった』私は心の中でそう思った。

チャネリングを終え、女性が帰った後、扉が開いて正巳が入って来た。

「めぐみさん、どうもありがとうございました」

「どう致しまして。大した事はできなかったわね」

「いえ、サポートしてもらって助かりました。どうしても子供の話になると、僕はいつも集中が切れかけてしまうんです。ところで食事はどうされますか？」

「今の話の後では、ちょっと食べたくないわね」

「そうですね。チャネラーの佐々木さんが此処で少し休まれますので、下のラウンジでお茶でも飲みましょうか？」

「それが良いわ。なんだか閉じ込められて居るような気になってたの」

その後正巳は少し疲れた顔のチャネラーを伴って部屋に入り、私に紹介する。

「佐々木さん。今日僕をサポートしてくれた伊藤めぐみさんです」

「はじめまして」私はそう言って微笑んで見せる。

「こちらは、うちの契約チャネラーの佐々木武司さん」正巳が言った。

「はじめまして」その男も少し疲れた顔でそう言った。

「いつものように、少し休んでから帰って下さい。僕達は下のラウンジにいますから」

「分かりました。ありがとう」佐々木さんがそう言った。

私と正巳はキーを持ってラウンジに降り、コーヒーを頼んだ。

「八時から誰がするの？」私が尋ねる。

「また、違うチャネラーが来ます。佐々木さんには一日に一度が限界なんです」

「そう言えば随分疲れてたみたいね」

「はい、彼はエゴが強いから」

「エゴ？」

「そうです。自分の位置を少しでも高く見せようとする欲」

「それは仕方ないわね。普通の人が出来ない事を仕事にしているんですもの」

それに対して正巳は黙って首を振って見せた。私はそんな彼に微笑んで見せる。

私達は運ばれて来たコーヒーを飲む。

「そうだ、あなたに尋ねたい事があるの」

「何ですか？」正巳が少し首をかしげて見せた。

「今日春樹に体を貸してた時の事よ。私達の会話がどんな風に聞こえてたのかなって思って」

「普通に聞こえてましたよ。そう言えば、今日はチャネリングの説明の後、あまり話してなかったですね。いや？何か話してたのかな？あまり覚えてません。でも、ずっと梶さんのめぐみさんへの愛を感じていました。良いですね。何か、すごく羨ましい感じがします」

「正巳も早く素敵な恋人を作りなさいよ。あなた見た目も良いし、性格もいいんだから、きっと素敵な女性を捕まえられると思うな。まあ男性でも別に構わないけど」

正巳は照れ笑いを浮かべて言う。「怖くない人が見つければ・・・」

「そうね。でも、きっと大丈夫よ。だってあなた、春樹も私も怖くないんでしょう？」

「はい。お二人は特別ですから」

「違うわよ。全然特別じゃない。これも魂の一面。他の人もその魂の別の一面。見る角度が違うだけで、同じものよ」

「同じものですか？」

「そう。みんな同じものの違う側面を受け持っているだけ。それで自分の知りたい面を持った幻を作り出して、それを楽しんでいるの」

「だったら、めぐみさんは本当に愛される事を望んでいたんですね。それであんなに強く愛する人を作り出した」

「そうかもしれないわね。自分では愛なんて必要ないって思ってたけど、魂はそれを望んでいたんだわ。でも、あなたも春樹の存在を望んだから彼を作り出したのよ。あなたを認め、導いてくれる人」

「そうですね。僕もやっぱり共犯ですか？」

「すごい言い方ね。主犯はあいつにしておきましょうね」そう言って私達は笑い合った。

「あっ」正巳が持っていたカップを置いた途端、体を緊張させて声を上げた。

「どうしたの？」私も飲みかけていたカップを置く

「まずい。きっと何かが起こってる」正巳の顔が見る見る青ざめて行った。

「めぐみさん。僕、先に部屋に戻ってます」そう言って素早い身のこなしでラウンジを出る。

私は残っていたコーヒーを飲み干して春樹に心の中で尋ねる。

『何が起ってるの？』

『ちょっとヤバイかな』

『私も行った方が良くいわね』

『そうだな、頼めるか？』

『その為に呼ばれたんでしょう？』

『すまない』

私は一人で頷き、精算を済ませて部屋に戻る。

エレベーターに乗り十階で降りた途端に、春樹の意志を感じた。

『姉さん、目を閉じてすべてを見るんだ』

私は両目をきつく閉じて廊下に出る。先程居た部屋は突き当たり右側だ。私の脳裏に黒っぽい霧のようなものを吹き出している扉が映った。それが廊下の右側、突き当たりの扉だった。

「何、これ」私は思わず言う。

『大丈夫か？怖くないか？』春樹の意志を感じた。

私は首を振ってその扉の前まで行く。閉じた目にカードキーが差し込まれたままの扉が見えた。

私は迷わずにその扉を開ける。嫌な臭いのする黒い霧のようなものが一気に吹き出して来た。私は息を止め、首をすくめて、目を閉じたまま中の様子を探る。先程春樹が清めた部屋とは全く違う、奇妙に歪んだ部屋が生き物のように脈打っていた。しかし、そこには誰もいない。私はベッドルームの方に足を進める。

「めぐみさん。来ちゃ駄目だ」中から正巳の声が聞こえた。

私はそれに構わずベッドルームへの扉を開く。大きな衝撃が私を襲った。そして後ろに弾き飛ばされる。しかし、私は誰かにふわりと抱きとめられていた。決して怪我などさせないと言うような、強い意志を感じた。それはとても心地良い感覚だった。私は思わず微笑んでもう一度ベッドルームに足を踏み入れる。

私の閉じた目は、ベッドの横に正巳が身構えて立っているのを捕らえた。そして佐々木氏がベッドの上で赤黒い炎に包まれていた。普通の炎と違って嫌な赤だ。それに向かって青白い光りに包まれた正巳が気を放っている。

「正巳。やめなさい。何も怖くないから」私が言った。

「天魔外道皆仏性 四魔三障成道来 魔界仏界同如理 一相平等無差別

ノウマク サラバタターギャティビヤク サラバボッケイビヤク サラバタ タラタ

センダマカロシャダ ケン ギャキギャキ サラバビギナン ウンタラタ カンマン」

正巳は私の声が届かないかのように、印を結びながら真言を唱え、気を発している。

それが佐々木氏に当たって、大きな衝撃とともに嫌な色の炎が飛び散る。私はそれにまた弾き飛ばされそうになったが、やはり誰かが私を抱き留めていた。佐々木氏はたいしてダメージを受けなかったようで、炎の中で気味の悪い笑いを浮かべている。そして、口から正巳に向かって炎を吐き出す。部屋の中に肉の焦げるような嫌な臭いが満ちていた。

私は佐々木氏と正巳の間に割り込んで正巳に言う。

「怖くないから、やめなさいってば」

印を結び直そうとしていた正巳が戸惑いながら動きを止める。私はそれを確認して振り返る。佐々木氏はまた赤黒い炎をまとめて憤怒の表情を浮かべていた。

私は彼に向かって手を伸ばす。

「どうしたんですか？」佐々木氏は、真っ赤に充血した目を皿のように見開いて私をねめつけると、口から赤黒い炎を吹き付ける。私はそれに一瞬怯んだ。しかし、その炎は差し出した私の手には届かなかった。届かないというよりも、それは二つに別れてあきらかに私を避けていた。

「めぐみさん、危険だ」正巳の悲鳴に近い声が聞こえる。そしてまた正巳が気を発した。濃度の違う赤黒いもの同士がぶつかって弾け飛ぶ。その衝撃に私は弾き飛ばされる。そしてまた柔らかなものの中にふわりと受け止められ浮遊する

。それはやすらぎの感情。

何も恐ろしくは無かった。閉じた目に佐々木氏は、邪悪なものとして映っていた。しかし、何故か私にはそれがとても滑稽に思えたのだ。誰かが悪戯で書いた不動明王のような感じがした。

私は奇妙な浮遊感とその安らぎの感情の中で、突然出雲で神であった時にしていた所作を始めた。別に何かをしようと思った訳ではない。春樹と行った出雲でのように、ただ、自然に体が動き始めたのだ。

大きな呼吸と共に、両手を大きく横に開き、それを体の中心で打ち合わせる。『パーン』と大きく音が響いた。私はそれがおもしろくてその拍手を続ける。その一音一音に乗って、ふわふわと浮遊している自分が更にどんどん軽くなるのを感じた。肉体の重みをその音が消して行くのだ。そして、私は肉体の質量と共にすべての感覚をも失って行った。

ただそこにあるだけの存在と化した。何にも捕らわれず、すべてを受け入れる存在。人々の祈り、願い、悲しみ、怒り、嫉妬、魔、恐怖、すべてそのまま受け入れる。そのどれもがエネルギーの現れ方の違いでしか無い事を私は知っていた。光りは闇をも包み込んでいた。闇は光りの中でさえ闇であり続ける事が出来る。それが神のエネルギーの特性だ。

出来損ないの不動明王も、正巳の恐怖に因る呪術も、すべてがいとおいしいもの。つまり神のエネルギーとして私の中に取り入れられて行った。

『歓喜』それ以外のものが何も無かった。私は舞った。その狭いベッドルームのスペースをもろともせず、すべての宇宙空間を自分のものとしたように伸び伸びと舞った。

気づいた時、誰かの腕の中だった。私はそっと目を開ける。私をのぞき込んでいたのは正巳だった。

「正巳なの？それとも春樹？」私尋ねる。

「五十嵐です。梶さんの方が良いですか？」

「いいえ、あなたの方が良い」正巳が私の体に回した腕に力を込めた。

「苦しい。春樹みたいね」私はそう言って少し笑って見せる。

「すみません。でも、嬉しかったんです」

「佐々木さんは？彼は大丈夫？」私は正巳の腕から起き上がって辺りを見回す。しかし佐々木氏は私の目に捕らえられなかった。

「大丈夫です。さっき帰りました」

私は居ずまいを整えてベッドに腰掛け、時計を見る。時計の針は七時半を指していた。

「次のお客さんが来るんじゃないの？」私が言う。

「はい」正巳はそう言って頷いた。

「私が余計にややこしくしたんじゃないかなければ良いけど・・・」

「全然！それよりめぐみさんは大丈夫ですか？」

私はそう言われて体を動かしてみる。どこにも、痛みも不都合も感じない。

「大丈夫みたいよ。それより隣の部屋、私が戻った時には、酷い状態だったけど、あなたもう一度清めないといけないんじゃないの？」

「見てみて下さい。めぐみさんがすべてを受け入れて真っ新たな状態に戻してくれてます。汚れなんて何も無い」

私はそう言われて目を閉じた。そしてそこに映る物を見る。

「確かに、春樹がやったすぐ後みたいね。それのもう嫌な臭いもしない」

「次のセッションは休んでいてくれて大丈夫ですよ。この波動の中なら僕だけでできっと出来ますから。終わったら一緒に食事をしましょう。今日は僕とお願いしますね」

「良いわよ」私はそう言って笑って見せた。

正巳が言ったように次のチャネリングは、穏やかに進んでいた。

私は春樹に尋ねる。『ねえ、私何をしたの？』

『神になったんだよ』春樹が穏やかな感情でこたえた。

『あなたがやったんでしょう？』

『違うよ。姉さんがやったんだ。俺は楽しんでただけ』

『でも、私を助けてくれたわよね』

『さあ？俺は知らないぜ』

『あれで良かったの？』

『ああ、完璧。後で五十嵐に聞いてみれば良い』

『そうね。私何がどうなってたのか全く分からないもの。ただ、あなたに言われたように目を閉じていただけ』

『それで良い。でも、俺もびっくりした。姉さんってもっと臆病だと思ってたから。あれだったらスイッチを切る必要も無さそうだ』

『だって、そんなに怖いお不動様じゃなかったもの』

『そうだな。思いが稚拙だったから、作り出すものも稚拙だった』

『子供の悪戯描きみたいだったわ。でも、本当はもっと怖いものが一杯いるんでしょう？その時にはちゃんとスイッチ係をお願いね』

『任せとけ』

『ところで隣は大丈夫？』

『ああ。今日はもうどんな魔も入り込めないだろう。この波動の中では愛の波動以外起こりようが無い。今日のクライアントは得してるよ』

『そんなものなの？』

『そうさ。波動の悪い時にはマイナスのリーディングが多くなる。そんなものなんだ。それより少し休め。俺が傍に居てやる』

『ありがとう』

私はそう言ってベッドに潜り込む。すぐに眠りに引きずり込まれた。やはり、疲れていたのだろう。

チャネリングが終わって正巳が扉を開ける音で目が覚めた。私はそっと起き上がる。

「寝てても良いですよ。チャネラーの人も今日は疲れてないって言って帰りましたから」

「大丈夫。もう、起きるわ。あなた、お腹空いたでしょう？」

正巳がベッドのそばに来て、私の横に腰を下ろして言った。

「めぐみさん。あなたって、人じゃなかつたんですね」

「酷い言い方ね」私は窘めるように言った。

「でも、あれは人の力じゃないですよ」

「怖くなった？」私が尋ねる。

「いいえ。でも、やっぱり少し怖いかな。僕が今までやって来たことのすべてが役に立たないって見せつけられたような気がします」

「そんな事無いわよ。あなたはあなたの人生を真っ直ぐに歩いて来たのよ。必要の無いものなんて何も無い。私は私の道を歩いているし、あなたはあなたの道を歩いている。それが一番大切な真理なのよ」

「真理ですか？」

「ええ、そうよ」私はそう言って彼と反対側からベッドを降りる。そして振り向いて続ける。「でも、真理に縛られちゃいけないのよ。あなたはあなたのやり方で生きれば良いんだから」

正巳も立ち上がって振り向く。「このままで良いんですね？」

私は笑って見せる。「それ以上のあなたなんていないわ。今のままのあなたが一番素敵なのよ」

正巳が照れて俯く。

「おなかすいたわ。今日はあなたが奢ってくれるんでしょう？もちろん経費で」
「めぐみさんだったら自腹でも惜しくないですよ。でも、お支払いの件も相談した方が良いですね」
「今のところ、食事だけで良いわよ。まだ、私の仕事に支障が出る訳じゃないし。メモリーの新社長としても、今は経費節約に努めたいところでしょう？」
「ありがとうございます。でも、梶さんにくれぐれも言われてますから」
「死んだ奴の言った事なんて気にしないで良いわ。もう少しこの状態が頻繁になった時に考えましょう。その頃には会社の方も少しは落ち着くでしょうから」
「そうして頂ければ助かります。でも、今のところ収支の方は問題無いと思います。受ける仕事も減らしましたが、社員も半分以上減らしていますし、経費の方もそんなにかかる訳じゃありませんから」
「いつもこんな部屋を用意してチャネリングするのに？」
「はい。月のうち四、五日の為に各地で部屋を借りるよりずっと安くつきます。それに、年間で契約しているからそんなにかからないんです。梶さんがうまく考えてくれてます」
「システムはちゃんと出来ているのね。でも、世間で色々あったからこれからはちょっと厳しいかもしれないわ」
「そうですね。でも、きっと大丈夫ですよ。別に会社組織じゃなくても、僕のしたい事は出来ますから」
「そう言えば春樹も年末にそんな事を言ってたわね」
「何て言ってもらえました？」
「駄目になるって言う事は、他にすべき事があるからだって。別にやめちゃっても構わないとも言ってたわ」
「なるほど。梶さんがそんなつもりだったんだったら、別にこの会社を守る事に執着しないでも大丈夫ですね」
「そうよ。すべて流れのままに楽しめば良いの」
「ありがとうございます。ちょっと気が楽になりました」
「それはそうよね。結構気が重かったでしょう」
「はい。でも、やれるだけはやってみますね。せっかく梶さんに教えてもらった知識ですし、残してもらった器ですから」
「それが良いわ。あなたはあなたのやり方で、楽しんで」
正巳が頷いて見せてから言う。「食事に行きましょう。店の予約はしてありますから」
「こんなに遅くても大丈夫なの？」もうすぐ十時に成ろうとしていた。
「任せて下さい。その後ちゃんと送ります」
「有り難う」
私はそう言ってバッグを持って部屋を出た。

ホテルの建物を出て、少し行き、細い路地を曲がる。正巳が連れて行ったのは小さな料理屋の二階だった。他に客は誰もいない。

私達はビールを一本だけ頼み、一応乾杯をした。すぐに料理が運ばれて来て、それに箸を付ける。
「めぐみさんはあまり飲まないんですか？」
「ええ。このぐらいがちょうど良いの」そう言ってビール瓶を指す。
「僕もです」正巳がそう言って笑った。
「ところで何がどう成っていたのか、それで私は一体何をしたのか教えてくれない？」
「エッ！何も知らないんですか？」彼は箸で持っていたものを落としそうになりながら言った。
「ごめんなさい。春樹にも良く『自覚が無い』って言われてたの」
正巳は大きく首を振って言う。「凄い。凄すぎる」
「教えてよ」私は拗ねたように言った。
「めぐみさんは神の力を見せてくれたんですよ」

「そう言えば私、あの時何故か突然、出雲でいつかしていた事をしたのよね。体を軽くするために拍手を打って、どんどん軽くなって、それで何も無くなってしまふのよ。人の意識が何も無い状態。歓喜だけが私を支配して、私は宇宙を舞った。それだけ。その後気づいたらあなたの腕の中だったの」

「フーッ」正巳は大きくため息をついた。そして「梶さん、酷いですよ」と独り言を言った。

「春樹を呼びましょうか？直接文句を言う？」私が言う。

「いえ、今日はめぐみさんと差し向かいが良いです」正巳が言った。

「ところで何故あんな状態になったの？」私がもう一度尋ねる。

「僕と佐々木さんの間に有る感情のしこりみたいなものだと思います」

「あれだけ愛のあるチャネリングをした人が、そんな事で？」

「ええ。元々エゴの強い人だから。それに、僕とはあまり相性が良くない。それで梶さんが今日めぐみさんと呼んだんだと思います」

「相性が悪いって？」

「多分僕があまり佐々木さんの事好きじゃなかったからだと思います」

「でも、今までも一緒にやって来たんでしょ？」

「はい。でも今までは梶さんが居てくれたし……。佐々木さんは梶さんの力を知ってた訳じゃないけど、一目置いていたから」

「あなたの力には気づいて居たのかしら？」

「多分、なんとなく気づいてたんだと思います。僕は梶さんみたいに自分の力を完璧にコントロールして押さえる事が出来ないから。それで変なものを拾ったりしてしまう」

「ライバル意識があったのかしら？」

「そんな感じかも知れませんね。それに、あの場所がその悪い思いを増幅したんです」

「あんなにきれいだったじゃない」

「何も無いって言う事は、どんなものでも大きく広がるって言う事です。それが愛の意識であれ、嫉妬や憎しみであれ。だから愛のチャネリングもうまく行ったし、佐々木さんの怒りも大きく広げた」

「そう言うものなんだ。で、佐々木さんはどんな風にそれを広げちゃったのかしら？」

「さっきまで彼は、僕がサポートしている事を知らなかった。その上、その僕にまでサポートが必要だったなんて全くの初耳状態。すべて自分の力でやっているって思っていたんですよ。それに今夜のセッションは特にうまく行った。本人も疲れてはいたけどとてもハイな状態だった。サポートを受けるって言う事は、僕みたいな若造に馬鹿にされてるんだって思ったみたいです。自分のチャネリングにけちを付けるのかって怒ってましたから。何か変ですよ。良く分からないんですけど、とても僕に対して怒ってたんです。僕もなんだかととても理不尽に怒られているようでだんだん頭に来ちゃった訳です。それで、ちょっと戦ってみようかなんて思って……。まだ、僕にもめぐみさんのパワーが残ってたのと、僕を通して送ったのが佐々木さんにも残ってたのがいけなかったのかな」

「私のせい？」

「違いますよ。僕のせいです。自分の器以上の大きなエネルギーを持つ事によって、自分の力を過信しちゃったんです。結局、部屋を清めるのと同じで、最後に全部引き取って元の状態に戻さなければならない。それを僕が巧く出来なかったんです」

「あの時あなたには彼がどんな風に見えてたの？」

「出来損ないの不動明王」

「それで、あなたは不動明王の大呪を使ったの？」

「めぐみさんもご存じですか？」

「知識としてはね。要するにあなたは『目には目を、歯には歯を』を実践しちゃったんだ。勝てるって思った？」

「ええ。あの程度のものなら普段の僕でも大丈夫だと思いました。それに今日は特に大きなエネルギーを持ってたし。」

でも、佐々木さんの方もそれを持ってたから、一発で仕留められなかった。ちょっとショックでした」

「随分修行したの？」

「はい。子供の頃に五十嵐の家に引き取られて、随分修行させられました。五十嵐の父は、五才の頃、母の旅館で遊んでた僕を見て、どうしてもと言って連れて帰ってほしいんです。母も僕の力を恐れていましたし、五十嵐の父も『このままでは大変な事になるから、是非うちで育てさせてくれ』って言ったみたいです。母も教育だけはちゃんと受けさせてくれるならと言う条件でそれを受けた」

「あなたは修行、楽しかった？」

「いいえ、大嫌いでした。学校へ行っても、みんなに苛められるし、怒りの感情が芽生えるとそれが力を持ってしまって、人を傷つけてしまう。それで、みんなは僕の事を化け物だと言って恐れ、遠ざけてしまう。家に帰れば辛い修行の毎日だし、逃げ込むところも無い。五十嵐の父はとても厳しくて、良かったのか悪かったのか今で言うひきこもりにもさせて貰えなかった。子供の頃の楽しい思い出なんてほとんど無いです。いつも歯を食いしばって堪えているか、隠れて泣いているかのどちらかです。僕が中学生の時に梶さんが家に来て、三ヶ月ぐらい修行した時に、僕をととても可愛がってくれたのが、唯一の楽しい思い出です」

やはりチャネリングの時に泣いていた子供は正巳だったのだ。

「辛かったわね。でも、その大変な努力をして身につけた力で相手をねじ伏せた後、どうするつもりだったの？」

「それは……。とにかく、あの場を押さえる事しか考えてなかったから」

「前に、春樹に言った事があるのよ。『戦っている限り、勝てない』って。それが真理なんだって」

「戦っている限り勝てない？」

「そうよ。私はあの時とても心地良かったの。とてもいとおしかった。戦っていたあなたも、怒っていた佐々木さんも。どちらも同じだけいとおしかった。だってどちらも同じものなんですから。何も怖くなんて無かった。つまり、恐れが無ければ戦う必要も無いのね。それで私は嬉しくって舞った。私がした事と言ったら、それだけなのよ」

「梶さんは何もして無いんですか？」

「春樹はただ私のする事を楽しむだけの存在。でも、嫌なものを見せないようにスイッチ係をしてくれるって言ってたけど、今夜のはそんなに怖く見えなかったから……。でも、あなた達の戦いのエネルギーに弾き飛ばされた時、後ろで受け止めてくれたのは彼だったかもしれないわね。絶対守ってやるって言うような強い意志を感じて、とても嬉しかったの。でも、本人はそれに答えなかったから、それが本当に春樹だったかどうかは分からない」

「めぐみさんのその力はどこで身につけたんですか？」

「何もしていないわよ。私はあなた達みたいに修行もしていないし、誰かに力の使い方を習った事も無い。ただ、春樹に愛する事を教えてもらっただけ。そして私の龍が愛の大切さを教え続けてくれているだけよ。私が目を閉じて見えるものは春樹が見ていたものなんですって。彼が勿体ないからって私にその力を預けて行ったらしいわ。だからそれも別に何の努力もしないで身につけちゃったの。ごめんなさいね。本当に私は何も知らないで此処にいるのよ」

「信じられない」正巳はそう言って首を振り、残っていたビールを飲み干した。

私はビンに残っていたビールを彼のグラスに注ぐ。

「すみません」正巳はそう言って少し笑って見せた。そしてそれを一気に飲み干して言う。

「でも、めぐみさんの使った力はあきらかに神の力だった。めぐみさんはとても優しくに笑いながら部屋に入って来て、僕達の間に入った。そして、僕の攻撃を止めさせると、佐々木さんに何かを尋ねたんだ。佐々木さんはそれに対して口汚く罵った。でも、めぐみさんはそのまま拍手を打ちながら、どんどん輝きを増して行った。すると、とても強いのに眩しくない不思議な光りが僕達を包んだ。その光が僕達の内にある嫌なものをすべて溶かして洗い流してくれるのを感じました。暖かくて、柔らかくて、心地良い。それが心の中に広がって、誰も否定する必要が無い事を気づかせてくれた。そして自分自身をも否定する必要はないんだって。嬉しかった。めぐみさんは僕達の知らない言葉を歌うように唱えて、ただ白く輝きながら立っただけなのに、それがそのまま神に会ったって思えたんです」

私は、頷いて言う。「そうよ。多分あれは神。出雲で春樹と一緒に思い出したの。でも、あの神は、あなた達が思っ

いる神とは根本的に違うものなのよ。あれは純粋なるエネルギー。すべての幻の元になるエネルギーよ。いつかの私はそれを体に移して人の前に見せていただけ。それが過去なのか未来なのか、違う次元での事なのかは分からないけど、いつか私がしていた仕事だったの」

「唱えていたのは古代語ですか？ひふみの祓え言葉に似ていたような気がする」

「何も知らないのよ。私が意識したのはただ拍手を打って、歓喜の舞を舞ったことだけ」

「めぐみさんはただ立っていただけですよ」

「そう。きっとエネルギーの波動が私にとっての舞だったのね」

正巳は大きくため息をつく。

「僕にはめぐみさんの言葉が、神を称える歌のように聞こえました。そして『すべては我の中に在り』と言う意味が最後に伝わってきました」

「出雲の時は『我は此処に在り』だったらしいわ」

「らしいって、それも知らないんですか？」

「そう。春樹に聞いたの。多分、事代主」

「託宣ですか」

「多分ね。本人には何も自覚が無いの。でも、出雲の時は私の中に本当に何も無かったのよ。それはとても恐ろしい感覚。思い出だけで震えるぐらいにね。その時は、純粋なエネルギーを体に宿す為に、人ではない存在として生きたの。

でも、今夜のは違った」

「どう違ったんですか？」

「いとおしかったのよ。全てがいとしくて、抱き締めたいような感覚なの。どこにも恐怖が無くて、なにもかもが一つって言うような満ち足りた感覚」

「きっと、めぐみさんが変わったんですよ。梶さんの愛に満たされたから」

「そんな感じかもね。でも、誰もが持っているのよ。だって、みんな同じものなんだから。私の場合は、私がそれを望んだのと、その思いを受けた春樹が私の恐怖を巧く取り除いたから思い出したの。多分、そういう事だと思うわ」

「恐怖が全ての邪魔をしているって言う事ですか？」

「恐怖が全ての邪魔って言う訳じゃない。必要な恐怖も存在するから。でも、必要の無い恐怖に縛られると、愛の波動は起こらない」

「めぐみさん。龍が笑ってますよ」正巳が私の後ろを見ながら言った。

「あなたには形が見えるのね。春樹は色が変わったって言ったわ」

「多分、それも、めぐみさんの変化と関わっているんだと思います。梶さんが今いたら、きっと形が見えたと思いますよ。だって、とてもはっきりしたエネルギー体ですから」

「龍の知識を私が引き出す時に龍が姿を見せるって言う事みたいね。きっと春樹もそのうち形を持つわね」

「初めは色が変わるだけだった龍が形を持ったように？」

「そうね。そうすればあなたも少し楽になれるわ」

「僕は梶さんを降ろすの、好きですから構わないですよ。それに、梶さんを降ろせば、めぐみさんを抱けるし・・・」

「ちゃっかりしてるわね」

正巳はとても可愛らしく笑って見せた。

「でも、あなたに合った人を早く見つけなさいね。きっと若くって可愛い人が見つかるわ。それとも、ちょっとマッチョな頼れる人の方が良いのかしら？」

「めぐみさん。僕は男が好きなのは訳じゃないんです。梶さんが好きだっただけですよ。勘違いしないで下さい。僕だって抱き締めるのなら柔らかな女性の方が好きです」

「でも、抱き締められるのは？」

「それは、否定しませんよ。でも、梶さん程僕を愛してくれる男の人なんてきつともういないですよ」

「あなたにとって春樹は、父親みたいなものだったのかしら」

「そうですね。本当の父親は誰か分からないですし、五十嵐の父はあくまでも師匠ですから。抱き締め、導き、愛おしんでくれる父親が梶さんだったのかも知れませんね」

「お母様は？」

「るみだけです。五十嵐の家に母はありません。それで軽い女性恐怖症があるのかな？今は全然そんなふうには思わないけど、子供の頃には、母は僕を捨てた憎い人だったし。今はとても可愛い人ですけどね。それに家にいたのは厳しい師匠と、修行中のむさ苦しい行者ばかりだったから」

「だったらあの女好きの春樹って、あなたには理解出来なかったんじゃないの？」

「でも、梶さんって遊んでた訳じゃないですから」

「いつもその時その時で真剣だったから？」

「そうですね。それに梶さんは相手が必要とするものを与える事が出来たから。それが出来るのにしない人の方が僕には信用出来なかったし」

「完全に刷り込まれてるわね。まあいいわ。でも、あなたもちゃんと恋をした事、あるわよね」

「ええ。でも、前に言ったみたいに途中で怖くなって駄目になったんです。だから、軽いお付き合いでみんな止めていきます」

「でも、そろそろ結婚も考えて良い年でしょう？」

「そうですね、今はそんな事考えられません。それに、自分が親になるなんて想像も出来ない」

「急ぐ必要も無いかな。必要なものは必要な時にやってくるしね」

「そうだと良いですね。とにかく今は、もう少し自分自身の問題を片付けないと」

「まだ暫くチャネリングの仕事が続くの？」

「いえ、明日から東京でセミナーです。その後札幌でセミナーが一つあって、それが終わったらチャネリングセッションがあります。でも、札幌のは篠田さんだから安心です」

「そう、篠田さんとエアーによろしく言っておいてね。またお会いしたいですって」

「分かりました。必ず伝えます」

「じゃあ、暫くはあなたこっちに居ないのね」

「ええ、全部で十日程大阪を空けます」

「良かった」

「僕が居ると困りますか？」

「私だって仕事の段取りがあるのよ。いつも遊んでる訳じゃないの」

「すみません。無理言って」

「構わないわよ。今日はちょうど空いてたし、とても楽しい一日だった。それに美味しいものもご馳走に成れたしね」

「本当にこれだけで良いんですか？」

「良いのよ。別に遠慮してる訳じゃないんだから。一応仕事って言うものに対して私にもそれなりの定義があるの。それに今日のは、当てはまらなかつただけ」

「仕事の定義って、参考までに教えて貰えませんか？」

「自分で納得したものを仕上げてお金をもらうって言う事よ。今日のは何も自覚の無いままに終わっちゃったし、それが誰かに喜ばれる種類のものでも無かったから」

「佐々木さんは喜んでましたよ」

「怒って帰ったんじゃないの？」

「いえ、恥ずかしいって言って、めぐみさんが気が付く前にそそくさと帰っちゃったんです。でも、確かに喜んでました」

「私、彼に何をしたの？」

「佐々木さんのエゴを食べちゃったんですよ。僕だったら、潰す事しか出来なかったでしょう。でも、めぐみさんのエネルギーは全部そのまま受け入れて、肯定してしまっただけで、暫く涙を流してたけど、後悔って言う感じでもなく、傷ついた風でも無かった。それで恥ずかしいって言って帰っちゃったんですよ。いつも虚勢を張ってたあの人が、あんなにシャイなところがあったなんてちょっとびっくりです。前よりちょっと好みに成れました」

「良く分からないわね。でも、怒っては無かったのね」

「大丈夫です。またうちの仕事を受けてくれますよ」

「だったら良かったわ。それだけが心配だったの。あなたの邪魔をしたんじゃないかって」

「もしそうなっていても、それはそれで意味があるんでしょう？」

「それはそうよ」

「でも、めぐみさんはいつも僕に気を使ってる。僕の事を子供扱いしているのかな？」

「そうかしら？でも、意地悪言ったり、突き放したりするには、もう少し親しくなる必要があるだけなんだと思うわ。もちろんあなたの事可愛いって思うけど、馬鹿にしてる訳じゃないのよ。私、元々人見知りタイプなの」

「そんなふうには見えないですけど」

「そうなの。本人がそう言ってるんだから信用しなさい」

「ほら、また僕の事子供扱いしてる」

「だって、あなた一回りも年下なのよ。それは仕方無いでしょう？」

「分かりました。いつかちゃんと一人前の男として認めさせて見せますよ」

「期待してるわ」私は軽口を叩いた。

正巳は横を向いて口を尖らせた。

「可愛いわね」私はそんな彼にそう言って追い打ちを掛けた。

正巳はその後ちゃんと車でオフィスまで送ってくれ、握手して別れた。

翌日の午前中に、元夫から電話があった。

「めぐみ。何不良してるんだ。一昨日も夜居なかったし、昨日も居なかったろう」

「ええ、ちょっと用があったのよ」そう言えば彼から二晩とも留守電にメッセージが入っていたのを忘れてしまっていた。

「まあ、良いか。それより、今夜は家に帰れるのかい？」

「ええ、そのつもりしてるけど」

「だったら、明日の土曜日に梅を見に行こうよ」

「どこへ？」

「北野天満宮」

「良いわね。この分だとお天気も良さそうだし。でも、京都は寒いからまだそんなに咲いてないかもしれないわよ」

「少し咲きかけた位が風情があって良いんだ。梅は咲きかけ、桜は散りかけ」

「そうね。じゃあ、今夜はなるべく早く帰って食事を作るわ」

「やったー。久しぶりだ。めぐみの特性カレーが良いな」元夫は子供のようにそう言った。男っていくつになっても子供なのだ。正巳だけが子供なんじゃない。

翌日、私達は暖かいコートに身を包んで北野天満宮の梅林へ入った。裏から入ったので川沿いの道に出た。寒さのせいか川沿いの梅はまだ一分から三分咲きと言ったところだ。それでも柔らかな香りが私達を包む。あまり咲いていないので人も少ない。

「なっ、咲きかけもなかなか良いだろう？」元夫がそう言った。

「そうね。三日前、私、大阪城の梅林へ行ったのよ。もうほとんどが満開だった。そこで珍しい人に会ったの」

「珍しい人って？」

「春樹よ」

春樹の死を知っている元夫は、不思議そうに私の顔をのぞき込んだ。

「大丈夫。多分まだ狂ってないと思うから。でも、それに近い状態かも知れないけど」

私はそう言って二日間起こった事を、河原のベンチに座ってゆっくりと彼に話して聞かせた。春樹の事も、正巳の事も、そしてチャネリングの後にあった事も。夫はそれを黙って聞いていた。私は春樹の言った『荒魂 和魂』については黙っていた。

聞き終わった夫はベンチを立て「上の方がもっと咲いてるよ」と言うと、私の手を取って立たせた。そのまま私の手を手繰り寄せ、強く抱き締めた。そして、口づけした。

「幽霊に連れて行かれる前に、僕が抱き締めておかないとな」彼はそう言って笑うと、私の手を引いて歩き始めた。

見上げると白梅の古木が遠慮がちに花を付けていた。小さな花にもかかわらずその馥郁とした梅の香りは、私と元夫をすっぽりと包み込んでいた。

梅の香りの元で始まった、不思議なものがたりはいかがでしたでしょうか？
まだいくぶんギクシャクした二人の関係ですが、この後季節が進むにしたがって変化していきます。

梅が散り、桜が咲く頃には次の物語をお届けできるかと思います。

白梅の香りに・・・

<http://p.booklog.jp/book/61723>

著者：n a o m i

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nekokiri/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61723>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61723>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ